



東方三界黃龍伝 「小龍編・第二部」

文・小龍

表紙絵・卯浪糸

目次

1	黄花洞にて	5
2	水晶宮にて	10
3	鎮江楼にて	44
4	バランス	71
5	ファーストコンタクト	82
6	東極山の攻防	91
7	ホークス君のお使い	99
8	火雲宮にて	109
9	セカンドアプローチ	128
10	あとかたづけ	143
11	大将たち	154
12	小龍を探しに	167

主な登場人物

- 碧霞元君へきかげんくん……四行マイスターという恐るべき力を持つ、天空山の管理者。
- ナンカイ・ホークス君参号……碧霞元君の霊獣。江戸っ子口調。
- 緑麗りよくれい……最初の黄龍の保持者。死して魂は転生し、李沙龍となる。
- 景春けいしゅん……東方軍大将。天界一という剣技を持つ。
- 巽凜しゅんりん……東海龍王。碧霞元君を「シアラン」と呼ぶ数少ない一人。
- 沙龍シャロン（甲斐馨）……緑麗の生まれ変わり。いまは天界の住民になっている。
- 木佐小次郎（真武君しんぶくん）……沙龍の親友。四方将神の一人。
- 白帝君はくていくん……四方将神の一人。
- 小龍シャオロン……かつて緑麗のペットだった幼龍。今は沙龍のペット。
- 泰山府君たいざんふくん……最高神の一人。冥府の王。娘の碧霞元君とは対立している。

1 黄花洞にて

三千年前——。

その日、黄花洞こうかどうにやって来たのは、その主よりも洞府の名にふさわしい人物だった。

大輪の黄色い花そのもの、と行っていいかもしれない。

スラリとした四肢、見事に整った鼻筋、ガラス細工のような緑青の瞳——。

そして、なによりも流れるような美しい金髪が目を引いた。

案内役のホークス君はゆうに三十秒は言葉を失ったものだ。

この金髪美人に対して、主の碧霞元君はあまりに「チマツと」しすぎていた。

百四十センチそこそこしかない身長、十七、八歳くらいにしか見えない顔立ち、それに、冗談のような色をしたざんばらの髪——。

この水色の髪は、数百年前の母親の看病と諸々の心労ですっかり若白髪になってしまったところ、市販の毛染めを試して失敗したものらしい。

しかし、本人はその色を気に入ったのか、大して気にしていないのか、そのままにしている。

ホークス君は対照的な二人を思わず見比べてしまつて、いや、いかん、と首を振つてから、

「お茶をいれてきやす」

その場を辞した。

だから、そのあとで二人がなにを話していたのかはほとんど知らない。滞在時間もそれほど長くなかつたように記憶している。

むしろ、用事が終わったあと、碧霞元君に「緑麗を帝都まで送つてあげて」と言われ、その背に金髪美人をのせて飛んだときのことはよく覚えている。

「え、じゃあ、行きはどうやって来なすつたんで？」

緑麗が霊獣は持つていない、と言つたのでそう聞いたのだ。

「歩いて」

「はあ!？」

「一か月くらいかかったかな。泰山……いや、天空山だっけ？ 噂通り、ここは

五行が濃いね！　こんなすごいとは思わなかったよ。シアランはよく管理者なんかやっつけられるね」

「……」

この金髪美人は素手でこの山を登ってきたというのだろうか。

五行の気脈が渦巻く、一般市民は気絶してしまうといわれている、この山を？
「そりゃ、あつしが言うのもなんですが、お嬢はピカーですからね！」

「うんうん」

緑麗がニコニコと相槌を打つもんで、ホークス君はすっかり機嫌をよくし、結局、帝都までの道中ずっと「お嬢自慢」をしていた。

「シアランは幸せ者だね！　こんな、主大好きで、愉快的な霊獣と一緒に過ごさせて
さ」

「いやあ、褒めゴロシ!?　緑麗様だったら、霊獣選び放題でしょうに、なんで御一人なんです？」

「いやあ、それがさ。田舎はゆるいんだけど、飲酒騎乗って帝都上空だとめっちゃや罰則キビシーのよ。それに、酔っ払い騎乗、ダメ、絶対！　って言うヤツも

近所にいてねー。それで、諦めた」

なるほど、二十四時間酔っぱらっているようなこの美人に「飲むな」は過酷かもしれない、とホークス君は思った。

いまだって、かなりアルコールは入っている感じだ。

おそらく帝都の制空圏内に入れば、ドーピングして「素面状態」を無理矢理作る気だろう。

しかし、それでも天空山を素手で登ってくる豪傑が居るとは思わなかった。

それがむくつけき山男ならともかく、こんなスレンダー美女である。「変わり者」という意味では確かに碧霞元君といい勝負だった。

ホークス君も帝都の噂は大体知っている。

この金髪美人が将神とよばれる地位に居ること、黄龍という無敵の神獣をその身に宿していること、おなじく麒麟を封じる玉帝とは仲が悪いということ――。

帝都の門前で緑麗をおろすと、ホークス君は言ってみた。

「緑麗様、よかったらまた遊びにきてくれませんか？ お嬢が字あさなを名乗ったの

はものすごく久しぶりなんすよ」

「そうなの？」

「ええ。かれこれ数百年ぶりくらい？ 字を名乗るってことはお嬢の場合『気に入った』と同義語でして」

このとき、緑麗が少し悲しそうに微笑んだのが印象的だった。

「そっか。でも、しばらく私も忙しくなるからなあ……」

「そすか。残念っす」

「まあ、でも、また会えるよ、たぶん」

「へえ！ お待ちしておりやす！」

そう言って別れた。

が、ホークス君がこの金髪美人に会うことは二度となかった。

2 水晶宮にて

天空山は今日も晴れ渡った空の下に、特徴的な峰を見せていた。

巨大な台形のどっしりとしたシルエットである。

周囲を背の低い山が囲んでいるが、その小山たちは、天空山の大きさを引き立たせるための存在でしかない。

頭一つ飛び出ている天空山は、天を突く、というよりも、天そのものである、というのが誰しもが持つ感想である。

その山頂には黄花洞こうかどうという洒落た庵があるのだが、訪れる者は滅多に居ない。元より、一般市民の立ち入りは禁じられている山である。

一年に一、二度、勅使がご機嫌伺いにやってくる程度で、火雲宮との事務的なやりとりは全てパソコン上でなされていた。

それとて、黄花洞の主である碧霞元君へきかげんくんが自らやっているわけではない。

彼女の霊獣であるナンカイ・ホークス君参号が、器用に両羽を使ってキーボード

ドを打っているのだ。

工部府の長官宛に送るメールは毎回同じ、

「天空山は今日も晴れだった」

である。

しかし、それだけでは自動送信だと疑われてしまうので、ホークス君は気を使つて、毎回、世間話程度の一文をはさむことにしていた。

例えば「朝晩冷え込むようになりましたね。ご自愛下さい」といったお決まりの文句や、「昨夜、料理番組を見て、パンの耳でおやつを作ってみました」といった日常の些細な出来事の報告とか。

勿論、主人の碧霞元君は、ホークス君と工部府長官がささやかな親交を深めていることなど知らない。

正確に言えば、ホークス君と工部府長官付き秘書官の間の親交、であるが、愛想のない主人の、火雲宮での株を上げておくというのは、ホークス君の使命でもあった。

『愛想がない』

というのは、碧霞元君に会ったことのある者なら、みなそう思うだろう。

ほとんど笑顔など見せないし、いつもつまらなそうな顔で、言葉も少ない。

これでは、ますます世間から孤立してしまうのではないか、とホークス君は心配しているのだ。

しかし、ホークス君が思うほどに、世間は碧霞元君を嫌ってはいない。

むしろ、碧霞元君に会ったことがあり、さらに、何度か言葉を交わしたことがある者は、たいていこの偏屈な『四行マイスター』を好意的に見ている。

彼女の地位と能力だけに好意を抱く不埒者も居るが、それ以外の者はわりと正確に碧霞元君の本質を見抜いているのだ。

つまり、あの愛想の無さは、五行の奔流の中で生きていくから、そうならざるを得ないのだろう、と――。

それは少しでも五行の素養がある者なら理解できる話だった。

五行――。木、火、土、金、水の力のことだ。

これらは人界では元素、エネルギー、資源などと呼ばれることもあるが、天界ではもっと身近なもので、住民一人一人がいずれかの力を持ち、それを色々な糧

として暮らしている。

さながら人間には魔法のように映るだろう。実際、火行の素養を持つ者は「掌上発火」という技が使えるし、水行の場合は「掌底落水」が使える。

このような魔法の力が使える代わりに、彼らは五行の気脈の影響をダイレクトに受けることになる。気脈とはつまり、物理的なものから精神的なものまで、全てを巻き込んで「氣」となった、東方天界全体を流れる風のようなものだ。

そんな天界において、四行を自在に操る碧霞元君は、普通の天界住民以上に、色んな人、物、感情にさらされることになる。

いったん心を閉ざし、不感症になることで、それらの奔流をいなし、自身への影響を最小限におさえているというわけなのだ。

例えば、こんなエピソードがある。

天空山の一带は滅多に雨雪も降らないことで有名だが、数年前に珍しく雪が降った日があった。

その日、碧霞元君は瑠璃色の大きな瞳を動かすこともなく、

「あ、雪降ってる。雪だるま作ろうーっと」

そう言つて、裸足のまま外に出た。

はしやぐでもなく、楽しむでもなく——少なくとも、ホークス君にはそう見え
た——、碧霞元君はまるで仕事のように雪だるまを作り上げると、しばらく雪雲
に覆われた暗い空を見ていた。

足元から凍つてしまったのではないか、とホークス君が思うほど、長時間そこ
にたたずんでいた碧霞元君は、やがて、

「お帰り」

と、雪雲に呟いた。

誰に対しての言葉なのかは分からなかったが、天空山に雪が降るといふこの珍
しい現象は特別な意味があつたのだろう。

ホークス君が後になつて知つたのは、この雪が降つた日から一月くらいした
後、玉帝が崩御したといふことだ。

天空山はもともとは泰山たいざんという名前なまえで知られている。全ての五行の気脈の出発
点であり、東方天界の心臓部といえる場所だ。それ故、この山の重要性は火雲宮
と同順位とされていた。

つまり、外敵の侵入を受けたときは、火雲宮の防衛に割くのと同じ人員、同じ規模でもってここを守れ、という意味である。

この霊峰を管理する碧霞元君は、天界のあらゆる異変を察知することができた。彼女の千里眼と『四行マイスター』たる力を以ってすればそれはたやすい。

黄花洞のテラスで、碧霞元君は玉露を飲みながら、

「真武君はマメだね。三日おきに火雲宮と鎮江楼を往復してるよ」と呟いたりしている。

ホークス君にとってはお馴染みの風景だ。

抑揚のない口調でつまらなそうに話すのは、碧霞元君の常である。

ホークス君は碧霞元君の子供の頃から世話をしているので、彼女はそれをポーズでやっているわけではなく、ただ、表現方法が他の人と違うだけだ、と知っている。

五行のマイスターレベルでもなければ碧霞元君の苦労も分かりずらいだろうが、長年一緒に居れば喜怒哀楽くらいは分かる。

今日の碧霞元君は愚痴をこぼしながらも機嫌はいいようだ。

小さな体からは快晴の空と同じ匂いがする。

「いまだき公務員なのに二十四時間、一年中働けって、明らかに労基法違反じゃない？ 誰か後任を探してくれってずっと言ってるのに、無視してる方が職務怠慢だよね」

「お嬢の場合、『二十四時間労働』とは言えないんじゃないすか」

ホークス君の指摘は的確だ。

碧霞元君は、終日、携帯ゲーム機で遊んでいるだけで、端から見ればとても仕事をしているようには見えない。一応、天界の領土に五行の異変があれば察知できるように、アンテナは張っているらしいのだが、それだけである。

『五行観測』というのが碧霞元君の唯一にして重要な仕事なのに、彼女はそれを受動的にしか行っていないのだ。

が、そういったアンテナを張ることで、常人には分からぬ苦労や疲労もあるのだらう、とホークス君は善意の解釈をしている。

「お嬢、遠足じゃないんですから、お菓子は置いてってくださいよ」

碧霞元君の両手にはクッキーやポテトチップス満載のビニール袋があるのだが、ホークス君はそれをよしとしない。まるで、小さな子を嗜める母のようだ。

「遠足みたいなものでしょ。水晶宮すいしやうきゆう までは遠いよ」

「あっしにかかれば一時間も掛りませんぜ」

と、ホークス君が言うので、しぶしぶ左手に持っていた方のビニール袋は置いていくことにした。

しかし、右手のビニール袋は絶対持っていくつもりでいる。さらに、今日は普段持ち歩かない扇子を二本、帯に挟んでいた。

泥棒に入られるような心配はないが、碧霞元君は一度だけ部屋を振り返った。久々の遠出である。

ワサツと白い羽を下げ、ホークス君は主人が乗り込みやすい体勢を取る。

「ハイヨー、ホークス君！ 北北西に進路を取れ！」

「がってんでい！ ……って、行き先は水晶宮じゃないんですかい？」

「うん。水晶宮だよ？」

「じゃ、東南じゃないんですかい？」

「そういう細かい突っ込みはしなくていいの。ノリなんだから」

「はあ……。心配になってきた。お嬢、天界の地理、把握してます？」

「エー、してるよー。……多分」

怪しいもんだ、とホークス君は思った。

碧霞元君は「自分から見てこっち」といった方向は恐ろしいほど正確に分かっているのだが、それを実際に経度や緯度で示せ、と言われれば、かなりトンチンカンなことを言うだろう。

エメラルドグリーン色のホークス君が、晴れ渡った大空を飛翔する。

両羽を広げれば五メートルはあるかという大きなホークス君は、名前のせいで鷹と間違われることがあるが、れっきとした鸞らんである。

『ナンカイ・ホークス君参号』

という仰々しい名前は、南海の浜辺で拾われたことと、碧霞元君にとっての三代目の霊獣、という意味からきている。『ホークス』の部分は単なる語呂である。

かつて泰山府君に仕え、いまはその娘に仕えるホークス君の望みは、ずっと見守ってきたこの小さな『お嬢』が心身ともに平穏を得ることに尽きる。

それが難しいことは分かっている、どうにかならないものか、と心を砕かずにはいられない。

道中、碧霞元君がいつもの抑揚のない言い回しで呟いた。

「そういえば、甲斐馨のそばには小さな龍が居たね？」

「ああ……、薄汚れた緑色の、貧相な幼龍でしたっけ？」

ホークス君にとって、主人を乗せて飛ぶこともできないものは霊獣に非ず、という意識があるので、小龍はせいぜい貧相なペットである。帝都上空を行き交う霊獣たちにも、優劣の意識はあるらしい。

「あの子さー、どういうつもりなんだろうね？」

「どういうって、どういう……？」

「まあ、甲斐馨に懐くのは分かるとしても、九雷元帥の傍をうろろしてるのがサッパリ分からないよ」

碧霞元君の意味不明な呟きを、いちいち質すようなことはしない。ホークス君

にはどうせ分らない話なのだ。

胴着に袴といういつものいでたちで、碧霞元君は涼しげに風を受けている。

しかし、今日の碧霞元君はいつもと少し違う。扇子もそうだが、頭の上に金冠がのっているのだ。

この金冠は、本来、天帝と四海龍王にしか許されないものであるが、先代の天帝（玉帝）が碧霞元君の能力と職務に敬意を評して授けたものなのである。

——と言えば聞こえがいいが、碧霞元君にしてみれば、公の場ではこれを被ることを義務付けられてしまった、という感覚だ。

黄花洞を出る前に愚痴っていたように、碧霞元君はあまり自分の仕事に熱心ではない。ただ、他にやる者が居ないので仕方なくやっているだけなのだ。

ほどなくして建造物が見えてきた。ホークス君が短く告げる。

「お嬢、水晶宮ですぜ」

紺碧の海を背景にした、美しい宮殿である。

薄い青色で統一された外壁は、周囲の落葉松の鬱蒼とした森に溶け込むどころか、目立って輝いているようにも見える。

優美な外観からはとても想像がつかないが、長い歴史の中で何度も戦場となり、難攻不落と言われた、龍族最大の本拠地でもある。

上空から見える水晶宮の門前には、数名の人影があった。東方軍の駐在部隊だろう。一つ一つは米粒ほどの大きさにしか見えない。しかし、碧霞元君は、その米粒のような影の中に『木行マイスター』をすぐに見つけることができた。

「ああ、居る居る。キャパは結構大きいのに、あの人は木行の使い方がいまいち分かってないよね」

そんな独り言を呟いてから、ポテトチップスの欠片で汚れていた口元を拭いた。ホークス君は、いまの碧霞元君の評が東方軍大将に向けられたものだと分かる。初めて東方軍大将を訪ねに行った帰りにも同じようなことを言っていたからだ。

「お嬢にかかれば、そりゃ、みんな、カスでしようよ……」

「でも、嫌いじゃないな。あのタイプは」

「……」

ホークス君は、ただでさえ悪い目付きを、ことさら悪くした。

碧霞元君は、あまり人を嫌うということはない。

が、同時に、あまり人を好きになることもない。

つまり、他人に関心がないのである。

そんな碧霞元君がわざわざ「嫌いじゃない」と言ったのは、なにか含みがあるに違いない、と思っただからである。

水晶宮の門前広場に舞い降りたホークス君と碧霞元君は、いきなり数人の兵士に囲まれた。予想通りである。水晶宮が軍事施設だから、というのもあるが、ただの民家であろうと家主の許可なくその敷地に入れば、不審人物扱いされて当然である。

しかし、今日の碧霞元君は金冠を被っている。そのおかげか、いきなり刀槍を向けられるようなことはなかった。

「何者だ」とざわめく兵たちには構わず、こちらに歩いてくるしかめ面の男にひらひらと手を振る。東方軍大将の景春である。

兵たちが道を開け、景春が目の前に来ても、碧霞元君はホークス君の背から降りようとはしなかった。

それを、やや傲慢な態度だ、と一部の者は思ったはずである。

「水晶宮に御用でしょうか」

しかめ面は変わらないが、景春は最敬礼の姿勢を取った。

なんとといっても相手は天界の最高神の一人、泰山府君の娘である。それだけでも充分、失礼があつてはならない相手なのに、碧霞元君自身も『天空山管理者』という最重要ポストに就いている。

いくら敬讓の苦手な景春とはえ、礼を尽くさないわけにはいかない。

「あれ？ 前と随分態度が違うね」

碧霞元君はケロリと言った。

「以前は名乗ってくださらなかったのですね。当然、調べました。名乗らずとも察しろ、というのが貴女の意向でしたら、自分は官吏失格ですか」

「……」

そういうつもりではなかった。

あのかきはただ純粹に「東方軍大將に会いに行った」だけなのである。

そして、今日の用事は、というと、

「巽凜しゅんりんに会いたいんだけど通してもらえるかな？」

「龍王殿に？ それは勿論——」

「できれば東方軍大將も同席して欲しい」

「……」

碧霞元君が靈獸から降りないのは、水晶宮の防衛を一任されている自分の『許可』を待っているからだ、と気付いて、景春は手を差し出した。

その手を取って、碧霞元君はやっと一時間ぶりに地表を踏む。

誰かは分からないが、どうやら身分の高い客人だ——身なりはともかくとして

——、と気付いた兵たちも、警戒をほどいてそれぞれの持ち場へと戻る。

碧霞元君がホークス君になにやら言い含めている間、水晶宮詰めの上官のひとりがかそつと景春に耳打ちしてきた。

「どなたなんですか？」

好奇心旺盛な上官に景春は言っちゃった。

「土行以外の全てを極めた、本来なら、天帝陛下の隣にでも座っているはずの御方さ」

「つ、つまり、あの『四行マイスター』!? ヒエー、ホントに居るんですねー。いやはや……」

景春は興奮気味の士官に苦笑しながら、大昔のゴシップを思い出していた。

碧霞元君は先の東宮妃候補だったのだが、その東宮が皇族としての地位を辞退したので婚約も立ち消えになった、というのは有名な話である。

普通なら、そこで碧霞元君に同情の目が向けられるのだが、庶民レベルの根も葉もない噂では、碧霞元君に振られたから東宮は意気消沈して民間に下ったのではないか、とも言われている。

その真偽は、景春にはどうでもいいことだった。

ただ、家柄、能力ともに傑出した碧霞元君を火雲宮に迎えたいという首脳陣の意向は根強く、婚約が立ち消えになったあとも、では玉帝の正妃にどうか、という話があったのは事実である。

しかし、玉帝の嗜好や世間への配慮からか、結局、その話も立ち消えた。

玉帝の治世の頃、景春は帝都に居なかつたので、世間の評はよく知らないが、実際に会ってみると、なるほどこの風変わりな女性は皇后の地位に興味はないのだろう、と思う。

「ご案内します。こちらへどうぞ」

「ありがとう。よろしく」

小柄な碧霞元君は、十四、五歳の少女にしか見えない。並んで歩く景春はこの身長差が煩わしかつたが、どこか懐かしい気もした。

「東方軍大将」

本殿の奥に進む間に、碧霞元君は何度かその呼称を使った。

共に官職にある二人の立場を考えれば、それが当然である。

しかし、景春は少女のような碧霞元君からそう呼ばれることが、妙に落ち着かなかつた。

「軍部は龍王家と仲良くしてんの？」

唐突にそんなことを聞いてくる。

景春は眉を寄せたが、型通りに答えた。

「概ね良好な関係を築いていると思われます」

「うーん……。聞き方が悪かったか。じゃあ東方軍大将の個人的な感情としては？」

「……？」

ますます怪訝な顔をする景春は、碧霞元君の意図が分からない。他にはなにも説明してくれないのだ。

「もし、貴女が龍王殿を交えて自分に話そうとしていることが仕事のことなら、自分の感情は関係ないのでは？」

そう言うと、碧霞元君はなにかに気付いたような顔をする。

「そうだね。軍人さんはそれが建前か」

なんだろう、この神経を逆撫でするような物言いは——、と景春は思う。

まるで自分を試しているようではないか。

最初に会ったときもそうだった。

景春は、

「すまんが、女子供の冗談に付き合ってもらえるほど暇じゃないんだが」

とまで言つて、正体不明の少女を摘み出そうとしたのである。

一言名乗れば済むところを、正体を隠して東方軍の本部に物見遊山とは。

（東方軍大将の眼は腐っている、と笑い者にするつもりだったのか？ だとしたら、相当の根性悪だな）

しかし、権威を笠に着るような人物ではあるまい、とも思う。

それは、彼女の衣服が物語っている。

簡素な、というよりは、質素な、といった方がよさそうな、お世辞にも金冠とは似合っていない、地味な服装なのである。

「異凜は『東海の至宝』を東極山に置いてきたという話だけど、いまは誰がそれを管理しているの？」

広い廊下には誰も居ない。碧霞元君は構わず聞いた。

「自分の指揮で、東方軍が嚴重に管理しています」

「なにも問題はなく？」

「……」

景春がここでなにも行動を起こさなければ、今度こそ無能な大将と評されると

ころだっただろう。

しかし、にわかには携帯電話を取り出して、東極山に駐在させているスタッフと連絡を取る景春を見て、碧霞元君は軽く頷いた。

そして、数分のやり取りを見守っていたが、最後には飽きて、水晶の柱の装飾を眺めたりしていた。

「いまのところ不審な情報はありません。が、警戒は強めておくように指示しておきました。賊に襲われる恐れでも？」

幾何学模様のようなレリーフをなぞっていた碧霞元君は、

「いや、まだ大丈夫だと思うよ」

とだけ言った。

大理石の廊下を歩きながら、景春にとって意味不明な会話が続く。

「どうも窮屈そうだね。普通に喋っていいよ」

「……」

景春はまたしても眉を寄せたが、許可が出たのなら、無理にへりくだる必要もない。

「……あんたはなにを知っているんだ？」

本来の不躰な口調に、碧霞元君は驚くこともない。自分でそうせよ、と言ったのだ。

「それを、東海龍王と東方軍大将に話すために来たんだよ」

「他の三方は？」

景春がそう聞くのは当然である。

つまり、東だけでなく、西と北と南にも、同じように警戒が必要なのでは？

と言っているのだ。

「北は手遅れで、西は不要、南は別の意味で不要」

「……？」

その言葉の意味もよく分からなかったが、おいおい分かるのだろう、と景春は思った。

巽凜の反応は落ち着いたものだった。

元々、碧霞元君とは既知である。

「『東海の至宝』に関しては、東方軍の方々にお任せしていますので、私からは特になにも」

淡黄の衣装の裾を払げて長椅子に座る巽凜は、やんごとなき公主そのものだった。

おっとりとした口調で言ってから、傍に立つ景春を見上げる。その視線には、巽凜の信頼が見て取れる。

碧霞元君は、フム、と頷いた。

「ちよつと聞いておきたいんだけど、仮に、そうならざるを得ない事態になったら、『東海の至宝』を一時的に東極山から動かしても大丈夫？」

巽凜が自ら淹れてくれたアップル・ティーは、これでもかというくらい甘い香りがした。

碧霞元君の好みではないが、ポテトチップスを摘みすぎて喉が渴いていたので有り難く頂戴した。

「それは問題ないと思います。一年単位くらいでは、巽風にも影響はないと思い

ますし」

「そっか……」

碧霞元君は、潮風の入ってくる窓のそばまでゆっくりと歩いていった。

巽凜も、景春も、その所作を黙って見つめている。

『四海の至宝』を秦帝が集めようとしていることは、二人とも知っていた。

それがなんのためなのかは、色々な憶測があつて、どれが真実なのか分からない。

南海龍王奏欽は、それを「始祖の魂魄たる『四海の至宝』で、新たな将神を作ろうとしているのではないか」と推測している。

しかし、だとしたら、沙龍を将神に就かせようとしているあの若き天帝の行動は、矛盾するのではないだろうか。

碧霞元君が不機嫌にも見える無表情のまま沈黙してしまつたので、巽凜は声を掛けた。

「霞藍——」

彼女をそう呼べる人物はほとんど居ない。

実の父親である泰山府君ですら、その字あざなは使わないのだ。その字で呼ぶのは、あとは天真くらいだろう。

「ん？」

碧霞元君は振り向いて、大きな瞳をじつと巽凜に向けた。

子供の頃、机を並べて一緒に勉強したことがある巽凜は、碧霞元君の不機嫌そうにみえる顔に惑わされることはない。彼女の放つ五行の氣は曇っているわけではないからだ。

「なぜ『四海の至宝』なの？」

「失敗続きの敖明が、もうそれしか手はないと思ったんでしょ」

「やっぱり……、そういうことなの……」

巽凜の表情が沈む。

同席している景春は事態がよく呑み込めていない。

碧霞元君の話では、『北海の至宝』は既に敖明の手にあるという。

あの先代南海龍王は、盤古ばんこという伝説の始祖を復活させ、黄龍を排除しようとしている——、碧霞元君はそう言った。

もともと、黄龍を葬り去ろうというのは東王夫の悲願だった。が、東王夫は失脚し、いま、その遺志を継いだかに見える敖明の企みが着々と進行しているというのだ。

(軍部でも掴んでいない情報を、碧霞元君はどうやって知ったというんだ……?)

景春は、軍大将として、天界中の不穏な情報は、かなり早い段階で知る立場にある。

なのに、自分の耳にはまだそれらしい情報は入ってきていない。

だから、碧霞元君が言っているのは、目に見えない、形になっていない段階の話なのだろう——、と思うのだが、現実主義者はこれをなかなか受け入れられない。

「まあ、信じる信じない、動く動かない、はそれぞれの龍王や大将たち任せだよ。『四海の至宝』の話は、私にとってはついでのことだしね」

景春の疑心を見透かすように、碧霞元君はさらりと行って、暇を告げた。

巽凜は、直立不動の景春を促すように微笑む。

言葉にはしないが「お送りしてあげて」と言っているのだ。

「〴〵ついで〴〵ってどういうことだ？」

スタスタと歩いていく碧霞元君に追いつがった景春は単刀直入に聞いた。天井の高い玄関ホールに差し掛かったところで、碧霞元君は立ち止まる。

その位置からは開かれたままのドアが見え、ホークス君のエメラルドグリーン色の羽が忙しそうに動いているのが見える。それを取り囲んでいる兵士たちはみな楽しそうに笑っているが、彼らはきつとホークス君の存在が面白いだけだろう。決してホークス君の小喃が受けているわけではない。

「緑麗のことは知ってる？」

視線はホークス君に向けたまま、自分の答えを待っているであろう景春に言った。

「会ったことはないが、話ならいくらでも」

「そっか。じゃあ、いまの甲斐馨のほうは？」

「……。会ったことはある」

「どう思う？」

「なんだった？」

「彼女のこと、どう思ってる？」

「……」

景春は言葉に詰まった。

どう言えがいいのだろう。正直に答える必要はない。しかし、社交辞令を言ったところで碧霞元君はそれを聞きたいわけではないはずだ。

「なるほど。色々あったわけだ」

景春の沈黙を碧霞元君はすっぱり斬った。

「私は一度緑麗に会ったことがあるんだ。そして、好きになった。彼女は内と外が見事に一致するからね」

「どういう意味だろう、と景春が考える間もなく、碧霞元君は断片的な言葉をつむぐ。

「私は緑麗と約束した。その約束はもうじき果たさなきゃならない。でも、それ

を邪魔するんだ。敖明の馬鹿が」

「……」

幼児と話しているような気さえする。

会話は一応噛み合っているはずだが、こうも意味不明なのはなぜだろう。

「だから、敖明の企みは潰す必要がある」

「ちよっと待ってくれ。その約束というのは……？」

「軍部にとっては些細なことだし、大勢に影響はないよ」

個人的なことだから、言う必要はない、と言っているようだ。

ホークス君が『お嬢』に気付いて、はしやぐように両羽を振っている。

碧霞元君は片手を上げて「ちよっと待って」とホークス君に合図をし、への字に口を曲げたままの景春を見上げた。

「それ以上、説明が必要？」

見上げる大きな瞳はなにを考えているのか全く分からない。

「……」

これだから女子供は苦手だ、と景春が嘆くのも仕方がないかもしれない。

直感で物を言う、気まぐれで人の話を聞かない——、景春は『女子供』をそういうものだと思っている。

しかし、実際には、碧霞元君は景春とそう変わらない時間を生きている。見た目が少女であるだけだ。

ただ、碧霞元君という女性が、徹底的にプレゼンテーションに向いていないのは確かである。

これは四行マイスターの特質に加え、元々の性質もあるのではないかと景春は思う。

「あんたが言っているのは、将神緑麗のことだろうか？」

「うん」

「なら、いまの緑麗はそれを知っているのか？」

「約束のこと？ それとも、敖明のしょーもない陰謀のこと？」

「どっちもだ」

「昔の約束のことは覚えてないだろうけど、敖明のことは気付いてるよ。そして、怒ってる」

「怒ってる？　なぜだ？」

「だって、さんざん敖明に殺されそうになってるもん。そりや甲斐馨だって怒るよ」

「……」

景春は、敖明の加担した事件のことは知らない。そもそも、加担した証拠はないのだ。しかし、自分の前任者である敖坤が起こしたクーデター未遂事件のことなら報告書は読んだ。それに敖明が嘔んでいる疑惑がある、ということろまでは知っている。

「だから、甲斐馨はいずれ敖明を叩きのめすって意気込んでる」

「あいつがそう言っていたのか？」

「いや、私がそう感じているだけ」

「……」

景春は、硬い表情のまま、碧霞元君の旋毛つむじを見下ろした。

碧霞元君が言う『約束』が、彼女が言った通り、個人的で、些細なことなら、それはそれでいい。自分は関知することではない。

しかし、敖明の件についてはもっと具体的な情報が欲しい。憶測や勘だけでは、部隊は動かせないし、上官も説得できないのだ。

「はつきり言って、俺はあんたがなにを言っているのか半分も分からないが――」

気を悪くするかと思ったが、意外にも碧霞元君はにっこりと笑った。

ここで、笑顔を見せるところがまた不可解であるのだが。

「うん？」

「『東海の至宝』が狙われている、という情報提供については感謝する。ただ、贅沢を言えば、もう少し詳細な情報が欲しい。そして、できればその根拠も」

「うーん……」

碧霞元君の旋毛がゆっくり移動して、景春の体を一周するように歩いた。その間に、言葉を見つけてることを自分に課したのだろう。

しかし、結局うまい言葉は見つからなかったようで、景春の正面に立ち、お手上げ、というように両手を広げて見せる。

「ごめん、敖明が動くことは分かるけど、詳しい日時までは分からない」

的中率百パーセントの占いみたいなものか、と景春は思った。

碧霞元君がいつまでも動かないので、ホークス君がやって来る。

「お嬢、同窓会は終わったんですかい？　行きますかい？　次は鎮江楼ちんこうろうでし
たっけ？」

寄席の評判が良かった（と思い込んでいる）ホークス君は上機嫌である。

余計なことを言うな、と碧霞元君はホークス君を睨んだが、遅かった。

「東方軍大将」

ホークス君に乗り込んだ碧霞元君は、今度は見下ろす形で言った。

「自惚れで言うわけではないけど、『碧霞元君が言っていた』と言えば、大抵の人は信じてくれるよ」

「そうか」

「それと、あなたの一番の疑問だけど……」

「俺の疑問？」

なんのことだ、と景春は思った。

しかし、碧霞元君には伝わっているのだ。「なんでこいつは血縁でもないのに

沙龍に似ているんだ？」という景春の苛立ちに近い感情が。

「私が『四行マイスター』であることと、緑麗が『土行マイスター』であったことを考えれば、答えはすぐに出る」

「……」

「だから、結局は、誰の味方をしたいか、という観点でしか人は動かないんだよ」

「ちよつと待ってくれ。言ってる意味が分からない」

「分からなくてもいいよ。あの怖い人なら分かるだろうけど。あ、緑麗のコレね」

と、親指を立て、付け足した。

「私はあの人は嫌いだから」

その言い方には珍しく感情が籠っていた。

瑠璃色の大きな瞳が鈍く光る。

「……」

景春は、ひよつとして、自分は頭が悪いのではないか、と思った。

結局、碧霞元君の言っていることはなにひとつ分からなかった。

「お気をつけて」

「ありがとう。あなたとはまた逢うと思う。じゃあね」

碧霞元君はそう言っていたが、景春は正直もう関わりたくない、と思った。

この手のマイペースな少女はどうも苦手だ。

せっかく忘れていたのに、思い出してしまったではないか。

あの、横柄で人の話を聞かない、傲岸不遜の代名詞のような女性のことを――

。

3 鎮江楼にて

碧霞元君は、人を評する際に「内と外」「表と裏」といった表現を使う。

簡単に言えば本音と建前のことだが、碧霞元君が言っている「内」や「裏」というのは、かなり深い場所にある無意識のことである。本人すら気付いていない「無意識の本音」といったものだ。

四行マイスターには、それが『視えて』しまわらしい。

『読心』と同じで、その人が秘密にしていることの内容まで分かるわけではないのだが、「なにかしら腹に隠し持っている」ということは分かる。

だから、碧霞元君の人付き合いは自然と淡泊なものになってしまふのだ。

特に、そういった無意識の本音が外側には決して現れず、まるで正反対のように振舞う人物は苦手である。五行の中にあつて、それは違和感と混乱をもたらすものでしかない。

いわゆるサイコパスと呼ばれる人間などがそれに当たるだろう。

「内と外」のギャップが大きければ大きいほど、それを体感できてしまう碧霞元君の違和感は大きくなり、ひどいときには平衡感覚さえも狂う。実害を伴う苦痛だ。

「あの人は嫌い」

と、碧霞元君が言うときは、性格が悪いとか、気が合わない、という意味ではない。

「内と外」が一致しない人物に近付くと、自分が苦しむので嫌だ、という意味である。

五行の流れの中に生きている碧霞元君にとってこれは深刻な問題だった。理解者も居ない。

普通のマイスターでは、この苦痛はなかなか理解できないだろう。

ごく稀に居る二行、三行マイスターなら、あるいは、同じ世界に身を置くことができるかもしれないが、一体誰が好き好んでそんなことを？

碧霞元君とてこの比類なき才を望んで得たわけではない。これは天賦なのである。

「腹黒いくらいなら可愛い」

と、碧霞元君はよく言う。

「内と外」が一致していれば、いや、一致していなくとも因果関係が分かりさえすれば、どうということはないのだ。

碧霞元君が嫌う人物は、常に「意識と無意識」が乖離している。これは、腹黒い人物のことを指すのではない。

ある意味、病んでいるのは確かだろうが、そういった者は、自ら意識と無意識を乖離させている傾向がある。

恐らく、本人とて止むに止まれぬ事情でそうなったのだろうが、「酔狂な……」と碧霞元君は思わずにはいられない。

どんな生き方を選ぶのも自由とはいえ、なにも一番の苦痛を——同時に、それは碧霞元君にとっての苦痛にもなるので——選ばずともよいのに、と。

その意味では、いまから会いに行く人物は、碧霞元君にとっては非常に好ましい、といえた。

「内と外」が一致しているし、どこにも負荷がかかっていない——、と碧霞元

君は思っている。一行を極めた四方将神にしては珍しい。

数時間の空の旅である。

既に持参したお菓子はなくなってしまった。だいぶ北上したので、そろそろ防寒対策もしなければならぬ。これから向かう鎮江楼は、一年中、雪に覆われた地である。

「またこいつか……」

ホークス君の背の上で、碧霞元君が唸った。

携帯端末にメールが入っていたのだ。熱心な求婚者の一人で、外交部に勤めている男である。

毎回、凝ったメールを送ってくるのだが、碧霞元君は十回に九回は無視して、十回に一回は一文字だけで返信していた。つまり『是^{はい}』か『没^{いいえ}』だけ。

脈がないのはとつくに気付いているだろうに、男の方も意地になっているのかもしれない。

「こういうウザい男の迷惑メールをなくすためには、誰かと結婚するしかないのかなー」

ここ数百年、碧霞元君の口からは全く出ることのなかった言葉が聞こえてきたので、ホークス君は「おおっ!？」と思った。

『お嬢が白無垢を着るまでは死ねない』というのはホークス君の口癖で、これはケーブルテレビの時代劇チャンネルで覚えたセリフだが、ホークス君の心情そのものだった。

「求婚者ならそれこそ掃いて捨てるほどいるじゃねえすか！　そういや、お嬢はどういうタイプが好きなんです？」

「うーん……、タイプ？　そうだなあ……。ホークス君は？　誰がいいの？」
「いや、あっしが結婚するわけじゃ……」

と言いつつ、ホークス君はあれこれと考えてみた。

愛想がない——ように見える——主人と上手く付き合っていけるのは、やはり愛想のある人物ではないだろうか。穏やかでにこやかで、争いを好まない、心の広い男がいい。

いくら仕事ができて腕っぷしに自信があるとも、さつき会ったような無愛想な東方軍大将は自分が遠慮したい。あのタイプと自分の主人では、『明るい新婚

家庭』など、想像を絶する。

となれば――、

「やっぱ、天真大夫てんまたいふがいいと思うんですがね。向こうさんもまだ諦めてないようですし」

「天真くと結婚してもいいことないよ」

「なんでです？」

ホークス君は常々不思議に思っている。

いささか博愛主義的のところはあっても、天真は自他共に認める名医だし、性格は穏やかで、あれほど文句のつけどころのない男は居ないだろう、と思うのに、碧霞元君は彼を『昔馴染み』くらいにしか見ていないのだ。

恋愛対象にならない男はどこまでもならないのだ、ということがホークス君には分らない。

「要するに、お嬢は、平々凡々な、絵に描いたような結婚は嫌なんですね？」

「血湧き肉躍るような、スリルを味わう生活もやだよ」

「……………」

なにかが違う、とホークス君は思った。

「あれ？ 真武君のところにお客さんが来てる」

寒空の中で、碧霞元君が呟く。

まだ鎮江楼ははるか先であるが、これだけ強い五行力を持つ人物が天界の領土を移動すれば、分かるものらしい。

「わおー。なんでこんな美形に？」

鎮江楼の玄関先で、挨拶も終わらぬうちに、碧霞元君は大きな目をさらに大きくして言った。

しかし、口調は抑揚がないままなので、それほど感動しているようには見えな
い。

碧霞元君は前世の真武君のことはよく知っているし、転生後もその存在は五行
の中では明確に認識していた。が、木佐小次郎に直接会ったことはなかったの
だ。

そこで、木佐の端整な顔立ちを前にそんな言葉が出たのである。

「生まれつきの顔に対して『なぜ』と言われても、遺伝子の組み合わせによる産物、としか答えられないんです」

木佐は、どこまでも冷静である。

こんな夜更けに、帝都の官邸ならまだしも、宅急便も届かないようなこの北の僻地に訪問者があることがおかしいのだが、さつきふらりとやって来た白帝君といい、この奇妙なコンビといい、どこかおかしいのではないか、全く、まともなのは僕くらいのもんだよな、そもそも常識知らずで人の都合などおかまいなしな馨と出会ってからは感覚が麻痺してしまっただけ——、などと思っているわけだ。

ただ、碧霞元君の薄着は気になった。

曲がりなりにも零下の鎮江楼を訪れるからには、いくら名のある神々といえど、コートくらいは着てくる。

この極寒の地に、普段着で気軽に来れるのは『火行マイスター』の中でも赤帝君くらいのものだ。

「そんな格好で寒くないんですか？」

ひとまず突然の訪問者たちを招き入れた。

碧霞元君の背後には一度会ったことのある、目つきの滑稽な霊獣が控えている。

「火行フル回転してるから大丈夫」

なるほど、やはり、赤帝君と同じ程度の力を持っているのか、と木佐は思ったが、同時に恐ろしいことにも気付いた。

碧霞元君は「木・火・金・水」という四行を自在に操るといふ。

天帝ですら「五行行使者」であつても、その一つ一つの五行力は、四方将神には到底敵わないというのに、彼女は、四方将神全員の五行力を、一人で全て持っている、ということになる。

(この小さな体で、か……)

木佐は、小柄な碧霞元君を見下ろして、大体、沙龍と同じサイズだな、と思つた。

髪が短い分、碧霞元君の方がやや小さく見える。

「あれー？ 珍しい。碧霞元君じゃねーか」

鎮江楼に遊びに来ていた白帝君が、茶碗を持ったままの姿勢でダイニングの方から顔を出した。

「お久しぶり、白帝君」

「やっぱお嬢が言ってた通り、先客がいましたね」

ホークス君はなにかを心配しているようだ。

「大丈夫だよ。白虎は中立を守る者。彼は『どちら』の側にもつかないよ」

自信に満ちたその言葉に、木佐も白帝君も、碧霞元君がなにをしに鎮江楼に来たのか、急いで考える羽目になった。

二人とも、ほぼ同じ量の情報を持っている。

そして、秀才型の木佐と、天才型の白帝君が、答えを出すまでにかかった時間もほぼ同じである。

『四海の至宝』の件か、と、二人は顔を見合わせた。

「夕飯はお済みですか？ 大飯食らいが夜食中ですから、よかったら、ご一緒に」

木佐はまずそんな提案をした。

難しい仕事の話は食卓を囲んでした方がいい。

沙龍なら、この方法は抜群に効果があるのだが――。

茶碗蒸し効果があったのは、ホークス君の方だった。

霊獣がダイニングテーブルについている風景というのも奇妙なものであるが、この鸞は普段屋内で暮らしているらしく、箸の使い方も巧みである。

「これ、キサコさんが作ったんで!？」

ぷるぷるとしたプリンのような表面はもはや職人技である。上品な出汁の味といい、この茶碗蒸しは作った本人のように完璧だ、とホークス君は思った。

食感も絶妙である。具もみな素晴らしく美味しい。三つ葉に銀杏、椎茸――。

ササミだけは一度、箸で摘んで、ジ……つと見ていたが、「諸行無常」と呟いて飲み込んだ。

「これ、あつしにも作れますかね!？」　よかったら、レシピ、もらえますか、キサ

「コさん！」

「切る位置が違うんだが……」

木佐の指摘は、興奮気味のホークス君には聞こえていない。

碧霞元君は、というと、対照的に黙々と食事をしていた。最初に、ここに来た目的を五分で話してから、あとはずっとこの調子である。

「でー、その敖明と敖丁の喧嘩が、どう関係してくるんだ？」

白帝君は、井飯の上に茶碗蒸しの中身をドバツとかけて、レンジでかきこんでいた。

芸術品のような一品を、そんな風に食べるなんて、とホークス君は木佐の代わりに内心憤慨していた。

「あれは勝手にやらせておけばいいんだよ。ただ、盤古がじゃじゃーん、と出てきちゃうと、いくら甲斐馨でも敵わない気がするから、それを阻止しようという話」

「ふーむ……？」

「敖丁が一人でなんとかできるなら、任せておいてもいいんだけどね。彼だっ

て、長年の因縁のケリを着けるのに、誰かが出張ってくるのは嫌だろうし」

その辺りは、碧霞元君もちゃんと心得ている。

「しかしさー？ 四海の至宝を一人で全部揃えるって大変だぜ？ それぞれ龍王が確保してるんだろ？ まあ、欽姫は敖明にとっては身内だから手段があるかもだけど、あの西海龍王が、みすみす『西海の至宝』を敖明に奪われる、なんて考えられるかー？」

確かに、敖閏ならそんなミスはしないだろう、と木佐も思った。

「それがさ、どういう経緯なのか分からないけど、いま『西海の至宝』は敖丁が持つてるっぽいんだ」

碧霞元君が意外なことを言った。

『四海の至宝』の現在地まで分かるわけではない。

ただ、碧霞元君が五行の中に感じる敖丁は、いままでは純粹な『火行』の存在だったはずなのに、そこに奇妙な『力』が加わった、というのだ。

「え……？」

白帝君も木佐も、怪訝な顔をした。

ホークス君は、三者会談には無関心で、木佐が持ってきてくれた茶碗蒸しのレシピを一生懸命書き写している。

ここで『四海の至宝』の行方を整理してみる。

まず『北海の至宝』は、北海龍王敖吉のクーデターが失敗し、北海龍王家がおり取り潰しになった時点で火雲宮に没収された。それを、敖明が密かに手に入れたことは、碧霞元君が証言している。

『南海の至宝』は、まだ、奏欽が所持しているはずである。

『東海の至宝』は、今頃、景春が東極山に出向いて、確保していることだろう。

そして『西海の至宝』である。これをなぜか敖丁が持っている、というのだ。

「数日前からなんかおかしいな、とは思っていたんだけど、敖丁の『火行』になにか別の力が加わってる。それがなんなのか、はっきりしないんだけど、多分、この感じは『西海の至宝』だと思っただよね」

「どうということなんだ？」

木佐が言いながら、煎茶を淹れようとしたら、ホークス君が「あ、玉露ありま

せんかね？」と凶々しく言っていた。

「よく分からないけど、敖丁も至宝を四つ集めてなにかする気だったら、話はややこしくなるね」

「うーん……」

唸ったのは白帝君である。

「敖閏と敖丁は、仲悪くないと思うぜ？ もし、敖丁が『西海の至宝』を持って
いるんだとしたら、それは、あのオッサンが敖丁を信頼して渡したってことだと
思う」

「うん、私もそう思うんだよね。だから、父親に嫌がらせがしたくて、西海龍王
から預かったのかな、とか」

「まあ、そう考えるのが順当か……」

碧霞元君は、わざわざ玉露を淹れなおしてくれた木佐に丁寧にお礼を言った。

食後は玉露、というのが碧霞元君の日常らしい。

「ひとまず、南海龍王家の親子喧嘩は置いておきましょう」

木佐がお茶菓子を出しながら言った。

「僕が気になるのは、貴女がさつき言っていた、緑麗さんとの約束の件です。そして、なぜ、一面識もない僕のところにもその話をしに来たのか、ということ」

「一面識はくはないんだけど……、まあ、いいや。えーと、輪廻転生のシステムを作った馬鹿の話はしたよね？」

「馬鹿って……」

木佐は、なんとなく見えてきた気がした。

敖丁と敖明、碧霞元君と泰山府君、という二組の親子は、それぞれ対立している。

この二つの対立は、互いにはなんの関係もない。

前者は『四海の至宝』を獲りあっており、後者は『輪廻転生システムの是非』を巡って対立しているだけだ。

しかし、この二つの対立は、いずれも黄龍の保持者たる沙龍に深く関係している。

つまり、敖明が『四海の至宝』を集めようとしているのは黄龍を排除するためであり、碧霞元君は緑麗との約束で沙龍になにかをさせようとしているのだ。

木佐が問うのは、その約束の中身である。

「個人的なことだよ。といっても、協力してもらおう以上、真武君には話さなきやいけないよね」

「……」

白帝君は薄々気付いただろう。『読心』で、彼女の殺意めいたものは分かる。それから、碧霞元君の独特な語りが始まった。

「私は、輪廻転生などなくていいと思ってる。物心ついたときからね。その理由は、聞きたいなら話すけど、いまは省略するとして——」

碧霞元君は、いきなり核心をつく話をはじめた。

敖明が『四海の至宝』を集めているから、気をつける——という警告は、景春に言った通り、彼女にとってはついでである。

ただ、敖明に沙龍を殺されてしまったのは、碧霞元君は自分の目的が果たせないので、「ついでに」敖明は潰す必要がある、と考えているだけなのだ。

「三千年前、緑麗がはるばる黄花洞こうかどうに来たんだ。私が緑麗に会ったのは、後にも先にもそのときだけ。で、彼女がなにをしに来たのかっていうと……」

碧霞元君の隣で、ホークス君は長い首を体に埋めるようにして眠っている。興味もないし、既に知っている話なのだろう。

「玉帝にクーデターおこしたいんだけど、自分は土行しか持っていない。四方将神達は無関係だから巻き込むわけにいかない。でも、一人じゃ『五行行使者』たる玉帝には到底敵わないだろうから、私の四行を貸して欲しいってことだったんだ。」

でも、私だって無関係じゃん？ だから、私を巻き込むのはやめてくれ、って言ったたら、じゃあいいやって、あっさり引き下がるんだよね。

あ、この人、勝つ気はないんだな、って気付いたわけ。

でもさ、じゃあ、なんで黄花洞に来たんだろうって、思うじゃん？」

「……」

木佐は、碧霞元君の話し方に「ん？」と思った。

沙龍に似ている気がするのだ。

しかし、沙龍はここまで——言葉は悪いが——馬鹿っぽくはない。沙龍が説明するときにはもう少しロジカルである。

では、単に、小柄な風体が似ている、というだけの、雰囲気の問題だろうか？ 「緑麗はね、結局、私の腹をさぐりに来たんだよ。で、もしそれが自分と一致するならば、万々歳。もう、二人で、あんなシステムなくしちゃえってことになったの」

あんなシステム——、というのは、碧霞元君がさつき不要と言い切った輪廻転生のことだろう。

「もしかして、阿姐も、輪廻否定派だったのか……？」

白帝君はいつになく神妙な顔をしている。

「緑麗が『黄龍の保持者』になったのはただの事故でしょ。なのに、その事故のせいで、ひとつの大仕事を抱えたまま、延々と生まれ変わらなくちゃならないなんて、そりゃ、うんざりするよ。私は緑麗の心情は分かる。

だから、緑麗は、転生後の自分が『もう輪廻なんてなくていい』と判断したら、そのときこそ、この魂魄管理システムをやめさせよう、と言ったんだ。それ

が、私達の『約束』」

「……」

「……」

木佐と白帝君の反応などお構いなしに、碧霞元君は続けた。

「システムを終わらせるためには、泰山府を解散させればいいって話じゃない。作った張本人が死なない限り、終了できないんだ。だけど、誰が“それ”をできる？ 仮にも最高神を殺せるのは五行行使者くらいしかないよ。それもただの五行行使者じゃない。それぞれの行を四方将神並に極められるくらいだね。つまり、五行マイスターってこと」

そうだ。ついさっき、木佐は思ったのだ。

もし、碧霞元君が、残りの土行を極めたら、文字通り無敵ではないか、と――

しかし、

「私は四行で限界だった。だから、転生後の緑麗に五行マイスターになってもらえばいい、と私たちは考えた。そこで、私は甲斐馨の体に、私の持つてる四行の

力を分けたの。彼女がこの世に生まれる直前にね」

「“分けた”……？」

木佐が呆然と呟く。

「うん。四方将神の力だって、分けたり、切り離したりできるよ。九雷元帥はやってる」

「ちよっと待ってくれ。じゃあ、いまの阿姐は碧霞元君の分身みたいなもん？」
「まあ、近いものはあるんだけど、別に魂魄を分けたわけじゃないから、姉妹とも言えないし、分身でもないよ」

この話は、木佐と白帝君には衝撃だった。

いや、二人だけではなく、全ての関係者にとって、寝耳に水だろう。

碧霞元君が二十余年前にそんな小細工をしていたということは九雷とて知らないし、泰山府君も知らないことだ。

「甲斐馨は、元々、緑麗の生まれ変わりとして、土行はある程度使える。さらに、潜在的には私が分けた分の四行も持つてるから、無敵なはずなの。ただ、本人が全然、五行術の修行をしないので、使い方はまるで知らないようだけど」

「……」

「……」

三人は、しばらく黙っていた。

碧霞元君は、一通りの説明ができた満足して、もう苦手なプレゼンテーションはしなくていいだろうと思っていたし、木佐と白帝君は反応すらできなかつたのだ。

「それで……、僕にその話をしたのはなぜなんです？」

ようやく、木佐がそう聞いた。

「うん。『陰中の陰』はね、貴方にしか止められないんだ」

碧霞元君は言葉を発することに疲れたのか、そうとしか答えなかつた。

が、木佐にはそれで充分である。

碧霞元君が沙龍になにをさせようとしているのかといえ、簡単に言えば『泰山府君を殺してくれ』である。

しかし、東方天界全てを巻き込むことは碧霞元君の本意ではない。

だから、沙龍が究極必殺技とも言える『陰中の陰』の黄龍を召喚したときは、

木佐にそのストッパーになつてくれ、ということだ。

「なんか……、物騒な話だな」

白帝君が他人事のように言う。

「それでもないよ。輪廻を否定している人はたくさん居る」

「まあ、仙界の奴等なんかはそうだろうが……」

仙道たちは、輪廻を苦しみだと思つているから、不老長寿を得る。ほとんど全員が『輪廻否定論者』だろう。

しかし、だからといって、輪廻を是とする天界に楯突くことはない。一部のレジスタンスたちは、単に天界の属国のようになっている仙界の有り様を憂いてい
るだけだ。

普段、西域の砂漠で暮らしている白帝君にも、仙道の知人友人はたくさん居るが、彼らは概ね、のんびりと日々を過ごしている。

「ひとつ聞きてえんだが、そうまでして親父さんを消したっていうのは、主義主張の他にないかあるのか？」

「別にないよ。敖丁と同じで、父親が嫌いだろうと憎んでいようと、だから『死

ね』ってわけじゃない。ただ、そいつを殺さないと、自分の目的が達成できないとなれば、殺しもするでしょ」

それは、碧霞元君のいつもの理屈である。

「うーん……、俺はあんまり賛同できねえな。まあ、止めもしねえけど」
「そう言うと思ったよ」

碧霞元君は、寝入っているホークス君を見て、「泊まらせてもらってもいい？」と木佐に言った。

木佐は頷いたが、まだ思考はまとまっていない。

ホークス君に毛布をかけてやって、碧霞元君を客室に案内する間にも、色々考えてみたが、

「どつちにしても、馨の答え次第、ということか……」

そんな言葉しか出なかった。

しかし、そうとなれば、答えはもう出ているような気がするのだ。

木佐が思うに、沙龍は、輪廻転生を否定することはないだろう。日本に居た頃ならともかく、九雷と出会ってからの沙龍は、むしろそれを肯定している素振り

さえある。

となれば、碧霞元君のやってきたこと、やろうとしていることは、無意味なのではないか。

「……」

客室の暖炉に火を入れる木佐は、自分はどうすべきかを考えた。

泰山府君に告げ口をするという手もあるが、それはあまり意味がない。あの冥府の創始者は娘の殺意などつくに分かっているだろう。

では、根回しして、沙龍に何かを吹き込むか？ いや、それも、意味がないように思える。

結局、見守るしかないのか、と思うのだが、木佐自身が言い続けてきた『緑麗さんと馨は別人』という心情は、碧霞元君の『輪廻は不要』という主張と部分的には符合する。

白帝君は、また違う感情を持っているはずだ。

彼には、特別な心眼があり、いまの沙龍を見ても、ちゃんとその内側にかつての緑麗を見ることができるところである。

しかし、木佐小次郎には、そんな心眼があつてもなくても、高校生のときに出会った甲斐馨は、甲斐馨以上の何者でもない。

「緑麗さんという『実例』に……、一番、輪廻転生の実害を蒙つたであろう人物に、その是非を問うという、貴女の姿勢は間違っていないと思う。結局、あとは、各々の感情次第、ということなんでしょう？」

そう言つて振り向くと、碧霞元君は窓辺でにっこりと笑っていた。

「うん」

暗い夜空は、雪嵐になつていた。

鎮江楼では珍しくない。朝には止むだろう、と木佐は思った。

「本音を言うと、僕は、馨に、いや、貴女にも、無駄な殺生はして欲しくない。その相手が知人なら尚更だ。しかし……、無駄じゃない、と当事者が思うのなら、仕方がない。僕らはある意味、自分で自分を守らなければならぬ世界に生きているのだから」

「そうだね」

「だから、僕は僕の感情と都合で動きますよ」

暖炉の薪がパチパチと勢いよく燃え始めていた。

木佐がダイニングに戻ってくると、白帝君はところどころ雪まみれになった体で、小さな雪だるまを作っていた。

外に積もっている雪を持ってきたのだろう。

単なる暇つぶしのお遊びである。砂漠育ちの白帝君は、雪が降ればはしやぐ子供気分というものをまだ持っているのだ。

魔法瓶サイズの雪だるまは、銀杏の殻を目に見立てて、三つ葉の茎を縦横にし、眉と鼻と口が作られていた。口を真一文字に結んだ雪だるまの顔は、キリツと締まって、誰かに似ている。

「なにやってんだ……？」

マホガニーで作られた大きなダイニングテーブルは、丁寧に上薬が塗られているとはいえ、雪だるまを直に置いていいものでもない。

これら鎮江楼の家具は木佐が買ったものではなく、元々あったものだが、それ

故、歴史的に価値のある、高価なものが多い。側面の縁に繊細な彫りが施されているこのテーブルは、故宮博物館に展示されていてもおかしくはない代物だ。

木佐が「湿気るからやめろ」と抗議しようとしたら、白帝君が片手を上げた。

「んー……、ちよつと待って」

「……？」

白帝君は、ぐるっと視線を一周させてから、奥の台所の方に行き、どこからか景品のようなライターを持ってきた。

そして、また、雪だるまの前に座る。

「この雪だるま、玄ちゃんに似てるっしょ。んで、このやたら高級なテーブルは木製だし、龍が各所に彫られてるから、青龍の旦那ってことにしておこう。安物ライターで悪いが、これは阿哥アージュ（※お兄ちゃんの意。赤帝君のこと）ね。さて、俺はどこに居るでしょう？」

なにやら面白いことを言い出した。

木佐は一体なにがはじまるんだ、と、興味深く見守った。

ダイニングの片隅では、ホークス君が寝息をたてている。時刻はとつづくに零時

を過ぎていた。

「はい、正解はここね」

と、白帝君はライターを持っていない方の手をふっと手品師のように捻って、その掌の上に、プレパラート大の金属板を出現させた。鈍いアルミのような色をしている。

手品ではない。彼はこれを金行術によって『生成』したのだ。

「これさー、結構難しいのよ？ 俺、これができるようになるまで、百年かかったもん」

「……」

木佐はほんのりと笑っている。

白帝君でも真面目に五行術の修行をした時代があったのか、と想像するのは楽しい。

「ま、それはどうでもいいんだけど。さて、この弱々しい火は、雪だるまに近付けたらジュツと消えちゃうねー」

白帝君はライターの火はつけたが、雪だるまに押し付けるまではしなかった。

安物ライターである。そんなことをしたら使い物にならなくなってしまう。

「でも、この薄い金属板を変形させて溶かすくらいはできるかな」

それも、最後まで実演はしなかったが、軽くあぶってみせる真似はした。

白帝君がなにを言いたいのか、すぐに気付いた木佐はやはり勘がいい。

「相剋そうこく（注1）の話か」

「ウン」

打てば響く、とは木佐のことを言うのだろう、と白帝君は思う。

兄同然の赤帝君は優等生ではあるがこの俊敏さはない。

いま白帝君が言った、水と火、火と金属の関係は、『水剋火』『火剋金』という言葉で説明される。

「そして、このちっちゃいナイフみたいな金属は……、やると怒られるからやらないけど、この木製テーブルに傷をつけることができる」

『金剋木』である。

この話は、さらに、木は土の養分を吸い取り大地を疲弊させ（木剋土）、土は水を吸い取って洪水をも堰き止める（土剋水）——、と続き、冒頭に戻るのだ。

全てに剋つ（勝つ）万能なものなどない。五行は全てバランスに始まり、バランスに終わる。

白帝君はこの話を子供の頃、師父の太上道君に嫌というほど聞かされた。

太上道君はなにも教訓めいたことを言っていたわけではない。これらは生きていく上での知恵に過ぎないのだ。

「黒檀製のリビングセットほどじゃないが、このテーブルだって時価にすると不動産買えるんだぞ」

木佐はぶつぶつ言いながら、大皿を持ってきて、そこに雪だるまを乗せた。

「土がきた」

白帝君がにっこりと微笑む。

これも高そうな磁器だったが、もとはただの土である。

「なあ、玄ちゃん」

「……なんだ？」

木佐は鎧戸を閉めながら、寝る準備を始める。

広い鎮江楼とはいえ、普段は一人しか居ないので、使っている部屋は限られて

いる。あとは火の元と、玄関の戸締を確認すればいいだけだ。

自分の部屋に戻って、着替えて、寝台に潜り込むまでに五分もかからないだろう。早寝早起きの木佐はそろそろ眠たくなっている。

しかし、白帝君は寝るつもりはないらしい。

碧霞元君の話聞いて、木佐に話しておきたいことがあるようだ。

「さっきの、どう思った？」

「親子喧嘩だろう？」

「まあ、そうなんだけどよ……。シアランは——、と言うとこれも『慣れ慣れしい』って怒られるんで、碧霞元君は、と言っておくが、いい歳こいた父親がエロ本集めたり、奇天烈な実験ばっかりしてるのがイヤってのは、勿論あると思うぜ？ でも、そういう部分じゃないんだよ。阿姐と出会う前に既に不幸な実例をいくつも見てきたんだ。その実例のひとつが母親の話でさ……」

なぜそんな内輪話を知っているのか、木佐はストレートに聞いてみた。

昔、碧霞元君と深い仲だったという告白を聞くのを覚悟で。しかし、白帝君の話は木佐の予想を一つ飛び越えていた。

「あ、別に碧霞元君と付き合ってたわけじゃねえよ？俺が付き合ってたのはその母親の方で……」

「人妻に手を出したのか。今更驚きはしないが、よく泰山府君に殺されなかったな？」

「うん、まあ……、あの夫婦は早くから冷え切ってたからなー」

「なるほど……」

「元々政略結婚だったんだよ。碧霞元君の母親は大したところのお嬢さんでさ……」

結局、白帝君の長話に付き合うことになってしまった。

女遊びと実験に没頭する父親、もはや趣味だけに生きる母親——。碧霞元君はそういう家庭で幼少期を過ごした。

冷めた夫婦を冷めた目で見てきた碧霞元君だったが、母親が病床についたときは身を粉にして世話をしたし、母親が死の淵で輪廻を拒否し『完全な死』を選んだときは、大いに悲しんだ。

「……」

木佐は、どこかで聞いたような話だな、と思った。

他ならぬ自分の実家のことだ。木佐の父親である黒田倫太郎もほうぼうに女を作って、家庭を顧みなかったし、母親は心労が祟って病死した。

「彼女は」

と、碧霞元君は自分の母親のことを言うらしい。

まるで、少し距離を置いた友人のように。

「彼女は生きることになんの意味も幸福も見出せなかったんだよ。できれば、私が彼女の生きがいになってあげたかったけど、愛してもいない夫との子供じゃ、しようがないよね」

そんな殺伐とした言葉を、白帝君は何度か聞いたことがある。

碧霞元君の母親は、自分の魂魄は廃棄処分にしてくれと遺言した。

例え前世の記憶を忘れたとしても、この魂魄には生きる意味がないと思ったのだらう。

「私は彼女がこの世のどこにもいなくなってしまうことが悲しかったよ。だって、だから輪廻があるのに。そうじゃないの？」

輪廻は、死に逝く者への救済と、残された者への救済と、両方の意味がある。しかし、『完全な死』を選ぶ者にもはや救済はない。

「なんでこんな馬鹿みたいなシステムがあるの？ 泰山府君はたったひとりの妻も救えなかったくせに、なにを救おうというの？」

碧霞元君はそう思った。

しかし、一時の個人的な感情に任せて、事を推し進めるほど激情家でもない。だったら、多数決にすればいい。

大多数の人が生まれ変わってよかったと思えないのなら、もう、こんなシステムは要らない——、と。

「あの変わり者は、実際に、統計を取ったんだ」

白帝君は言う。

天空山のメインコンピューターに保存されている、そのデータを一部見せてもらったことがあるらしい。

一部だけでもあれだけの量だったのだから、合計はいったいどれほどになるのやら推して知るべし。

「しかし、転生すると、前世の記憶を失うのが普通だろう？ 僕だってそうだし、馨だって、実際に覚えているわけじゃない。それで、どうやって統計なんか取れるんだ」

「なにも人界に降りて、前世を覚えている奴を見つけて出して、一人一人聞いて回ったわけじゃない。たぶん、冥府の入り口で魂魄をとっ捕まえるって方法だろう」

「彼女はひとりでそれを？ 天空山に居ながら？」

「どうやったかは知らねえが、まあ、協力者は居るだろうな」

「フム……」

「しかしな、玄ちゃん。そのデータも、結局、曖昧なんだ。死した魂魄と対話できるのは泰山府君親子のみ——、となれば、他のやつらはそれを伺い知ることができる。ぶっちゃけ、捏造だって簡単だ」

「確かに……」

「それに、『生まれ変わってよかったですか？』なんて質問に対して、はっきり是非を答えられる奴がどれほど居るってんだ？ 誰だって『そんなこと聞かれ

たつてすぐには答えられない』って言いそうじゃないか？」

「それで、埒が明かないから、もう最後の審判を馨にさせよう、というのか」
「そんなところだろうよ」

暖房の効いた部屋の中で、雪だるまは溶けかかっていた。

キリツとしていた三つ葉の眉が、やや八の字になっている。

(注1) 相剋……五行思想において、剋つ(勝つ)関係にあるもの。

鎮江楼から戻ってきてしばらくすると、碧霞元君は今度は帝都に行く、と言いつ出した。

普段引きこもっている主を外に連れ出すのは歓迎なのだが、最近の行動は例の計画に繋がっていると分かっているので、ホークス君の心情としては複雑である。

「お嬢、またそんないっぱいお菓子持ち込んで」

「帝都まで遠いんだから、いいじゃん」

碧霞元君の嗜好はその姿と同じく子供のころから変わっていない。ゲームに熱中したり、駄菓子ばかり食べたり、これではどこを切り取っても成人女性とは言えないのだが、ひよつとすると主は自らそう望んでやっているのかもしれない、と思うこともある。

大人になりたくない、という、あの有名な病気である。(ピーターパン症候群の

こと)

しかし、年々若返ってしまいうこの仕事について否定的なところを見ると、違うのかもしれない。いずれにせよ、ホークス君には分からないのだ。

「しかし、いまから行くと着くのは夕方になっちまいますぜ？」

既に昼過ぎという時間である。帝都まで急いでも三時間はかかるだろう。

「いいよ、別に」

「いや、よくねーっすよ。戻りが深夜になっちまいます」

「帝都に泊まればいいじゃん」

「……」

あれ？ とホークス君は思った。

いつもは父親の居る火雲宮付近には長居したくないと言って、宿泊施設は利用しないのに。

「どこに泊まります？」

「んー？ 五つ星ホテルなら別にどこでもいいよ」

「わっかりやした」

帝都にはVIP用の五つ星ホテルがいくつもある。

平日なら特に予約はいらないうちだろうと思って、ホークス君はそのまま飛翔した。

水雲宮の特徴的なシルエットが見える頃になると、碧霞元君は少し息を整えてシミュレーションを試してみた。

自分はよく知っている魂だが、向こうは初対面になるので、あまり言葉を省略しないようにしよう、と思った。

「最後に会ったのはルーシア・フォン・クリストフの魂か。だいぶ変わっただろうな」

数百年前のことだ。

冥府をさまよっていたルーシアはとても繊細な少女に見えた。

恋人の裏切りにあつて、そのショックのあまり、死んだことが理解できず、しばらくは誰ともコミュニケーションできないほどだった。

碧霞元君はその魂に辛抱強く話しかけ、なんとか事情を聴きとれるまでになった。そのとき判明した事実は、ちゃんと裏も取ったし、背景も調べた。

ルーシア・フォン・クリストフの天命は確かに十八年三か月と決められていた。

その天命を守るべく、天界側から見届け役が派遣されていたのも事実だ。

しかし、通常、見届け役の官吏は直接の手出しは許されていない。天のシナリオ通りに人間を動かすことはあっても、自ら手を汚すのは禁忌中の禁忌だ。

（九雷元帥はなぜ官吏に任せず、自らルーシアを殺した……？）

碧霞元君はそれも調べたのだが、納得できるようなデータは見つからなかった。

さらに不可解なことに、当該事件については、事情があつて別のエージェントが代理行使をしたという記録がちゃんと残っていることだ。もし、不都合ならそのあたりは改ざんされるはずである。

（玉帝も承知の上だった、つてことか）

もしくは、玉帝の命だった——とも考えられる。

しかし、この件はのちのち取引に使えそうな気がしたので、どこにも報告はしなかった。

もとより、上司も上官も居ない身だ。

碧霞元君の「アンケート調査」後も、ルーシアはすぐには転生せず、しばらく冥府内でぐずぐずしていたらしい。

本人が言っていたように「いまはなにもしたくない」という状態だったのだ。その悲しみにくれていた魂は、いま、碧霞元君の眼下で釣りをしながら昼寝している。

「お嬢、あの栈橋あたりでいいんですかい？」

ホークス君がクチバシで指して言った。

「うん、お願い」

バサバサと必要以上に大きな羽音を立てたのは、寝ている人に「お客さんが来ましたよ」と知らせるためである。

碧霞元君はしかし、沙龍は起きているのではないか、と思った。

麦わら帽子を顔に乗せているので表情は見えない。

「こんにちは」

挨拶はしておかないといけない。

基本中の基本だ。

「……」

しばらく待ったが返事はない。

彼女のお腹の上では小さな龍が体をのぼして寝ているが、この龍も起きない。

確かにポカポカ日和のいい天気だが、この無防備さはなんだろう。最高神と同等レベルのVIPが来ているというのに。

彼らの足元にはやる気のない釣り竿がセッティングされている。

大きめの石を積み上げて固定されているその釣り竿が小さなリズムを刻んで動いていた。

「……引いてるよ？」

そう言ってもオーナーの反応がない。

ややあって、

「小物は放っておく主義なんだ」

そんなくぐもった声が麦わら帽子の下から聞こえた。やはり起きていたようだ。

つまり、小物の客には挨拶しないという意味だろうか、と碧霞元君は思ったが、気にしなかった。自分は小物ではないからだ。

「だったら、リリースしてあげなきゃ」

「いま動きたくないんだ。気になるなら勝手にやっちゃって」

「……」

碧霞元君は特に腹を立てることもなく、釣り糸をたぐりよせ、暴れていた小魚を解放してやった。

「無駄に痛い思いをさせるのはどうかと思うけど？」

「リンリンさん特製の釣り針だから痛くないと思うよ」

「そうなの？」

「うん」

よし、だいぶ和やかな雰囲気だ、と碧霞元君は思った。これなら聞いても大丈夫だろう。

「あのね、聞きたいことがあるんだけど」

「ん……？」

「生まれ変わってよかった？」

「なんのこと？」

釣り竿のオーナーはやつと体を起こし、話す気になってくれたようだ。

「誰……？」

「私は霞藍^{シエラン}。はじめましてではないけど、はじめまして」

この字を名乗ったのは久しぶりだった。

もしかしたら緑麗に名乗ったときぶりかもしれない。

「ああ……、緑麗の知り合いか」

と、沙龍は非常に分かりやすい指針をくれたので、碧霞元君は微笑んだ。

地上出身者は仕方ないのだが、前世の自分は別人だと思っている。

そして、前世と同じに見られることを好まない。

「念のために三回くらい聞こうと思う。生まれ変わってよかったと思う？」

「……」

沙龍はうんざりした視線を向けてきたが、それができるといふことは信頼の証だ、と、碧霞元君は勝手に思った。

「私はあなたがなにを言っているのかよく分からないし、分かるうとする気もないので、さようなら。今度から来るときは正面玄関から来て下さい。多分、その調子じゃ、我が宮殿の庶務担当に追い返されるだろうけど」

まあ、そうだよな、と思う。勝手に押しかけてきたのはこちらなのだ。

「うん、分かった。じゃ、また今度でいいや」

この調子なら三回目までに普通に話すことができるだろう、と碧霞元君は待たせてあるホークス君に乗り込んだ。

「お嬢、いいんですかい？」

「うん、だいぶ仲良くなれたから、今日のところはいいよ」

「……」

どこが？ と、ホークス君は思うのだが、世間からだいぶズレているこのお嬢には言っても無駄だろうと知っていた。

6 東極山の攻防

天界領土の東端にある東極山ではいつもと同じように嵐が吹き荒れている。しかし、港近くの浜辺ではいつもとは違う、不穏な景色が展開されていた。ここには、普段、東方軍の士官と兵が数人駐在しているのだが、それらがすべて地に伏しているのだ。

さらに――、

「なにこのバケモノ」

冷やかな顔で、いま倒したものを見下ろす敖丁は、言いながらもそれが何者かということに興味はなかった。

どうせ付喪神の類だろう。月の光を千年も浴びれば、大抵の物は動き出す。ただ千年ものあいだ形の変わらないものがあまりないだけの話だ。

あとは功夫クンフーをつんで妖術でも使えるようになれば立派な妖怪のできあがりである。

「なんか、いま、喋ってなかったか、この石壁」

陽輝が、倒れて目を回している——目があることがまずおかしいのだが——石壁をのぞき込んで言った。

「しかも外国の言葉だったね。まあ、いいさ」

敖丁はスタスタと先に行ってしまふ。

石の壁だろうと、レンガの壁だろうと、喋るくらい驚きはしない。

「この先に神殿がある。『東海の至宝』はそこだろう。東方軍の連中は神殿には居ないと思うけど、油断はしないように。他にもこういうバケモノがいるかもしれない」

陽輝は敖丁の言葉を聞いているのか聞いていないのか、石壁をアーマライトでつついて生きている（？）かどうか確認をしていた。まったく動かない。それならそれでいいのだが。

神殿までの「お使い」など敖丁ひとりで十分だろうと思ったので陽輝は船に戻って昼寝でもするつもりでいる。

「……」

一応、通信端末を取り出ししてみるも、案の定「圏外」になっていた。小龍をつれてくるんだった——と、陽輝は暗い曇り空を仰いだ。

確か東極山には工部府の連中が仕掛けた監視カメラがまだ生きているはずだ。

あそこの連中も二十四時間モニターしているわけではないだろうが、泰山府君あたりはそれを盗み見しているに違いない。

天界領土で軍人がやることなど、だいたい筒抜けだ。

そろそろ自分にも造反容疑がかかるころだと陽輝は分かっていたので、装備しているスミス&ウエッソンのほうの弾は抜いておくことにした。

『東海の至宝』は敖明よりも先に奪取しなければならぬ——。

それが敖丁の使命だった。

いまのところ、敖明が東極山に部隊を送っている気配はないので、敖丁たちが『東海の至宝』を奪取してきたところを、さらに奪う算段だろう。

そうはさせない。

打てる手は打ってきた。

敖明はいま帝都から動けないはずだし、手足となる忠実な部下たちも数人は寝返らせた。

「まったく……、巽凜も景春もバカなの？」

無防備に神殿のホールに置かれている青い珠を見て、敖丁は呆れたように言った。

確かに東極山にたどり着くのがまず不可能と言っても、こうして神殿までやって来る者が実際に居るのだ。

せめてロンドン塔に展示されているイギリス王室の王笏（※世界第二位の大きさのダイヤモンドが使われていることで有名）並のセキュリティは施しておいてもいいのではないか。

無防備な『東海の至宝』を失敬して、神殿を後にする。

問題はそこからだった。

港へつづく山道で思わぬ人物に出くわしたのだ。

それは、向こうも同じだったらしく、同じ軍服、同じ肩章をした男は、敖丁の

姿を見て、驚いていた。

「まさかお前か！」

景春は既に大刀を抜く構えで敖丁の前に立ちふさがった。

この東極山に港はひとつしかない。景春が空からやって来たのでない限り、陽輝と出くわしたはずだが……。

(景春にやられたか)

敖丁は少々焦った。

陽輝をアテにはしていないが、接近戦で景春に勝てるはずはない。

少し、考える時間を作ろう。

「予想できなかったの？ いったい誰だと思ったのさ」

「大方の予想では、敖明殿だ」

「『大方の予想』を信じて行動するなんてバカすぎない？ 何年軍人やってんの

や」

「……」

景春は敖丁の挑発など取り合わない。腰を落としていまにも抜刀する構えだ。

「一応、聞いておこうか。敖丁、俺の管轄の島になにをしに来た」

「『東海の至宝』を拝借しに」

意外にも正直に答え、さらに実物まで懐から取り出して見せた。

「それはこの島に安置しておくものだ。勝手に持ち出すことはできん」

「知ってる」

「なら戻してこい。いまなら不問にしてやる」

「……」

これは時間稼ぎは無駄だな、と敖丁は思ったので、

「君こそ、いまなら見逃すよ。その剣を抜いたら、地に伏すことになる。さつき東方軍のスタッフたちが砂浜で寝てたでしょ」

「やはり、あれをやったのはお前か」

敖丁は色々と秘密兵器を持っているし、五行術に関してはどの大将よりも秀でている。頭脳だけではないのだ。

「戻す気はない、か。なら仕方ない——」

景春が鞘を持つ左手をわずかに動かしたとき、後頭部に衝撃が来た。

「う……っ！」

正面には敖丁。

背後には誰も居ないはずだったが、敖丁の言う通り、景春は地に伏してしまっ
た。

「わりー。ちよつと寝ててくれや」

アーマライトの銃床で殴ったのは陽輝である。景春がその気配に気づかなかつ
たのは、陽輝が文字通り姿を消していたからだ。

「遅いし、陰符の使い方が雑すぎる」

敖丁が文句を言っている。

「別にいいだろ。結果オーライで」

景春は朦朧としているが、陽輝の声を聞き間違うはずはない。

陰符とは本来五行のマイスターレベルの者のみが使え、姿を消すことのでき
るマジックアイテムなのだが、敖丁はこれを汎用に改良した。それでもかなりの
技量がないと使いこなせない代物ではあるが、陽輝はこう見えても五行の勘はい
い方である。

「ここに転がしておいていいのか？」

景春を見下ろして陽輝が言う。

「心配ならトドメ差しておいてよ」

それは敖丁ならではの冗談なのか。

「こいつにマグナム撃ち込むのはもう勘弁してくれよ。これでも大事なダチなんだぜ」

そうなのだ。

自分の周りにはやたら屈折したのが多いので、景春の実直さは貴重だ、と陽輝は前々から思っている。

「……」

その景春がなにかうめいていたので、陽輝は言っっちゃった。

「悪い。今度殴られてやるよ。まあ、俺が生きてたらの話だが——」

7 ホークス君のお使い

碧霞元君と泰山府君の仲違いは、鎮江楼で白帝君が言っていたように、母親のことが大きな原因になっている。

ホークス君はその時代を直接知っているし、泰山府君の霊獣だったときは何度か父親側の意見を聞くこともできた。

「政略結婚だったからのう。アレは気難しい嫁で、かまって欲しいのか、放っておいて欲しいのか、いまいち分からず、最終的にはワシもメンドクなくて、贅沢できるだけの環境を作ってやって放っておいたのだ」

「それは、金満夫の怠慢というのでは、オヤツサン……」
女心を理解しない男がやりそうなことだ。

古典の時代から、こういうのは変わらないらしい。

「ウム、少し後悔しておる」

その後、妻には早々に病死され、娘には嫌われ、殺されそうになっているいま

の展開を思えば「少し」どころか「めっちゃ」だろうに、とホークス君は思った。

泰山府君が妙な実験にのめりこむようになったのも、結局は家庭を顧みなかった男の行きつく果てなのではないか――。そんな風にも思う。

特に、このガラクタに溢れかえった部屋に来るたびに。

「あー、もう、またこんなに散らかして」

この前来たとき、あらかた片付けていったのに、一か月で元通りの汚部屋になってしまった。

まがりなりにも泰山府長官室である。

本来ならここにはマホガニーのつやつやの机や、黒革の椅子が置いてあって、長官は決裁を求められた書類を次々さばいていかなくってはならないような、そんな部屋なのである。

もしくは、冥府の王として、地獄の入口にデンと座り、死者の魂にジャッジを下してもいい。

それらの仕事は、いま、美人と評判の事務次官がすべてやっているのだが、こ

れはこれで機械のような喋り方をするスーパーエリートで、ホークス君は苦手だった。

用途不明の実験器具を押し分け、いつもの安物ソファに座ってモニターを眺めている泰山府君のところまで行くと、

「お嬢は本気ですぜ、オヤツサン」

少し強めに言った。

「ウム……」

「一体どうなさるおつもりなんで？ 緑麗様がゴーサイン出しちゃったら、お嬢は文字通り怖いモンなしになっちまいませんか？」

ホークス君がそう言うのは、本音の部分では主の計画を阻止したいからである。

「ウム……」

しかし、頼りのはずの元の主は生返事しかしない。

「真武君も特に諫めるようなことは言っていなかったし。あ、それに、東方軍大將しんぶくんなんですがね、ちよつと気になることが……って、あつしの勘違いかもしれねえ

んですが」

「ウム……」

生返事をしてしばらくしてから、

「ん？ 景春のなにが気になるって？」

一分後に聞き返してきた。

一応、話は聞いてはいるらしい。

「あの大將、なんか昔どこかで会った気がするんでやんすが」

ホークス君はそんなことを言った。

「どこかで？ どこで会ったって？」

「いや、それを聞いているのはこっちでさあ」

「フム……。あの男はな、ちとわけありで長いこと人界周遊しておったはず

じゃ。人界に降りたときに見かけたのではないか？」

「そうは言っても、あつしが人界に降りたのなんて、数えるほどしかねえんですがね。お嬢のお使いで『ドラ食え』とかいうソフトを買いに行ったときと、『サ
ンテンドーボタン』とかいう端末を買いに行ったときと……」

「そうそう。お使いで思い出したわい」

「はい？」

「ホークス君、お主、ちよつと玄都に行つて参れ」

「玄都？ 太上老君ですかい？」

「ウム。あの古いぼれが『霸王』を隠し持っているはずじゃ。それを貰つて来てくれ」

「は、はい？ 『霸王』つてえと、確か、幻の銘酒と言われている……？」

「ウム。一万年に一本しか醸造できない貴重な酒じゃ。もし、太上老君がごねて渡さないようだったら、『例の件をばらすぞ』とでも言つてやれ」

「えーと、オヤツサン？ その銘酒を一体どうなさるおつもりで？」

「なにか実験にでも使うつもりかもしれない、と思つて聞いたのだ。しかし、

「飲むに決まつておろう。酒は飲むためにあるのじゃ」

ものすごく当たり前の答えが返つてきた。

幻の銘酒といわれているくらいだから、さぞかし美味なのだろう。

もしかしたら、自分もご相伴に預かれるかもしれない。

「『霸王』を貰ってくればいいんですね？　じゃあ、ひとつ飛びしてきま
さあー」

泰山府君と太上老君は、それほど仲が悪いわけではない。

ただ、二人の力関係でいえば、泰山府君のほうが上なので、太上老君の立場は弱い。そんな太上老君が、ホークス君の姿を見ただけで顔をしかめたのも無理はなかった。泰山府君の使いで来ているのが分かったのだろう。

「二心を抱くのは感心しないがのう」

太上老君は第一声そう言った。いまの主に対して失礼ではないか、と言っている。それについてはホークス君も反論の余地はない。

「面目ないっす」

「お前さんの用件はこれじゃろ？」

と、太上老君は既に用意してあった白磁器を見せる。ご丁寧に桐の箱に収まっ

ていた。

意外にもあっさりとは運びそうだ。

「これ、『霸王』ですかい？」

「うむ。南海の匂いがするか？」

『霸王』は南海の真珠を浸して醸造するらしい。その真珠こそが一万年に一粒取れるという貴重品なのだが、ホークス君は太上老君の含みのある言い方に気付いた。

「あつしは確かに南海の浜辺で拾われたらしいですが、故郷のことなんざ覚えちゃいけませんよ。でも……、なんででしょうね。懐かしい感じはします」

「そうか」

受け取った桐の箱を風呂敷で器用に包み、風呂敷の端っこをホークス君は首にキュッと巻いた。

「泰山府君はどうでもよいが、碧霞元君にはよろしくな。あまり無理はしないように、と」

「はい。ありがとうございます」

霊獣にも優劣がある。

ホークス君は前の主人といまの主人が天界でも五指に入ること誇りにしているが、実のところ自身の能力はそれほど大したものではないと分かっていた。

スピードでは天界一といわれている黒焰虎こくえんこには到底かなわないし、戦闘能力においては西海龍王の竜生九子りゅうせいきゅうし たちに敵うものは居ない。

空で出会ったときはそれぞれの主人が譲り合ったり、霊獣が付度して飛行コースを変えたりするので問題が起こることはないのだが、相手が問題を起こそうとしている場合は別だ。

そんなときは、当然、問題は起こるべくして起こるのである。

(うわゝ)

ホークス君は行く手をふさがるように滞空している饕餮とうてつを見て、既に敗北を覚悟していた。

西海龍王配下の竜生九子たちの中でも、一、二を争うほどに好戦的な饕餮であ

る。

バッファローの二倍はありそうな四つ足の巨体で、顔は虎とも牛とも言い難い。ホークス君からすればもはや「妖怪」の域である。

その背には西海龍王が騎乗しているので、この饕餮の通せんぼは主のほうの意思だろう。

「やあ、ホークスくん」

ニコニコしながら西海龍王が声をかけてきたが、ホークス君は全身に汗をかいていた。

「こ、こんちやっす」

「いいもの運んでるね。どうしたの？」

「は、はい？ なんのことでしょう？」

男には

負けると分かっている

あがかねばならぬ時がある——かなり字余り。

「いやー、僕もねえ、プレミア品には目がなくて。ちよつと見せてもらえるか

な？」

これは強奪するつもりまんまんの言い方だ。

「え、えーと。申し訳ねえんですが、龍王様といえど、主人の命令にそむくわけにはいきやせん」

ホークス君が意を決して言うと、西海龍王は一瞬真顔になった。

「そうか。立派だね。……君はなぜ今になって泰山府君が『霸王』を始末しようとしているか、知ってるのかな？」

「いえ。そういうややこしい事情はあつしらは知らないほうがいいんです」

「そうだね。それも一理ある」

こんな戦々恐々としたのはいつぶりだろう。主が背に乗っている限りは無敵なので、こんな恐怖は忘れていた。

「大丈夫。痛くないから」

ホークス君が覚えていたのはそこまでだった。

ホークス君がさんざんな思いをして黄花洞に戻って来ると、碧霞元君は既に出かける準備をして待っていた。一瞬、泰山府君のお使いがバレたのかとギクつとしたが、

「帝都に行くよ」

それだけ告げられて、またすぐのフライトとなった。

最近の主は精力的にあちこちに出かけている。いよいよ計画を実行に移す段階であることが嫌でも察せられた。

「帝都にはどういったご用件で？」

「甲斐馨に会いに行く」

「ああ、あの偉そうな子ですね」

そう言うと、碧霞元君は珍しくフフッと笑った。なにがおかしかったのだろう。ホークス君には分からない。

最初、水雲宮に寄ったのだが、沙龍は居なかった。碧霞元君が「火雲宮に行きたみたい」と言うので、ホークス君は仕方なくそちらに羽根を向けた。

『お嬢』と一緒にときはあまり積極的に行きたくない場所ではないのだ。

泰山府君と鉢合わせさせるのだけはなんとしても避けなければならない。

もつともあの冥府の王が地上に出てくることは滅多にないのだが――。

火雲宮の上空は注意しなければならない。お偉いさんの霊獣が降り降りすることはあっても、ここの上空を横切る無礼者は居ない。とくに大極殿の真上は通行禁止だし、皇族のプライベートエリアの上空などは撃ち落されても文句は言えないのだ。

ホークス君は東の延喜門あたりで低空飛行に移り、最後は屋根から屋根へ飛び移るムササビ飛行でもって大極殿の西側まで来た。

ちようど、目当ての人物が歩いてくる。きらびやかな格好をしているので目立っていた。

「ここで接触するのはまずいな……」

碧霞元君はしばらく様子を見ていたが、思わぬ人物が登場したので、屋根の裏

側にササつと隠れた。

二人は、いや、一人と一羽は、景春が沙龍を軍事エリアの方に連れて行くのを、屋根の影からそーつと見ていた。

「なんか、ただならぬ雰囲気でしたねえ……。あれ、どういふことなんすかねえ……?」

ホークス君の滑稽な目が真横にツツツと動いて、隣の碧霞元君を見る。

「うーん……。ホークス君はもう少し男女の色々を学んだ方がいいんじゃない? って私が言っても説得力ないか……」

「ですなえ……」

と、思わず答えてしまったのを、ホークス君はそれほど気にしていない。

碧霞元君も苦笑するだけだ。

「しかし、あの大将も、お嬢がせっかく忠告したつてのに、みすみす『東海の至宝』を奪われちまって、無能なんですかねえ?」

「ホークス君も手厳しいね。まあ、あれは敖明の手に渡らなかつただけでもヨシとしようよ」

景春と沙龍の去った交差路はひっそりとしていた。

もうここに用はなくなつたわけだが、碧霞元君はふと交差路の奥を鋭く見つめ、帯に差し込んであつた扇子を抜き取つた。

「お、お嬢!？」

左側の壁の上に枝垂れ柳が見える。

その一点に風を送るように、碧霞元君は手にした扇子を下から上にヒュツと仰いだ。

距離はかなりある。

普通なら、扇子で起こした風が届くはずはないし、届いたとしても、柳の葉が一センチ揺れるくらいだろう。

しかし、碧霞元君は扇子を仰ぐのと同時に、そこに金属の塊を『生成』している。その金属弾が、柳の枝に設置されていた小さな監視カメラを撃ち抜いたのは、本人にしか分からなかつたはずだ。

つまり、この扇子は飛び道具にもなる。

「こんな所にまで……。ついこの前はなかつたよ？」

どこの官舎でもそうだが、あらゆるところに監視カメラはある。

それをいちいち気にしていてもしょうがないし、ひとつ潰したところで所詮イタチごっこなのだが、目の前にあるものを放置しておくのは面白くない。

火雲宮の各所に設置されている監視カメラは、どこかの組織が全てを一括で管理しているわけではない。色んな組織が複雑に絡んでいる。

例えば、公式に「治安維持のため」と称して設置されているものは東方軍が管理しており、非公式に設置されているものは諜報部がひっそりとモニタリングしていたりする。

軍部だけではない。

監察府や刑吏府、また、外交府なども、それぞれ独自に小型カメラを設置し、非公式に色んな場所のモニタリングをしていることだろう。

そして、それら全ての映像を、これまた非公式にモニタリングしているのが泰山府君なのである。

碧霞元君が険しい顔をするのも、そういった理由による。

「今日は無理だね。もう各所にバレちゃった」

ホークス君はホツとした。

火雲宮に長居してもいいことはない。

「じゃ、天空山に帰りましようや。今日はあつしが腕によりをかけて、キサコさん直伝の茶碗蒸しを作りますぜ！」

意気揚々と両羽根を広げるホークス君に、碧霞元君は、さつきから張り付いたままの険しい顔を向けた。

「ところで、ホークス君」

「は、はい？」

「なんか妙な匂いがするけど、どこかに行ってきたの？」

そんなことを言われても動揺などしない……つもりでいる。

「い、いや、そのう……。あつしも通うオンナの一匹や二匹、おりやすんで、そのう……。お嬢がお忙しい時なんかをぬってですね、ちよいと息抜きなんかも……」

「ふーーん」

碧霞元君の大きな瑠璃色の瞳はどこを見ているか分からない。瞳孔が虹彩を

覆ってしまいうほど巨大になっていた。

(や、やべえ！ バレてる!?)

ホークス君は冷や汗をたらした。

『壱号』と『弐号』は碧霞元君の勘気に触れて葬り去られたという。

死罪に値するようなことを仕出かしたのかどうかは、その場に居た者しか分からないのだが、碧霞元君は幼い頃から決して激情家ではなかった。とすれば、やはり霊獣の方に重大な非があつたのだろう。

しかし、一匹ならまだしも、二匹続けて、というところがなにか暗い事情を示しているのではないか——。そんな風にも思える。

『参号』のホークス君は幸いなことにまだ存命だが、泰山府君のお使いをやっていることがバレたらやはりただでは済まないだろう。

「で、『霸王』はどこに？」

「え？ いや、『霸王』ってなんすか？ 新しいゲームソフトかなんかで？」
すつとぼけてみるも、無駄だった。

絶体絶命——。

「泰山府君の腹の中とかだつたら、許さないよ？」

なぜそれを知っているのだろう、とホークス君は恐ろしくなる。

碧霞元君こそ、泰山府長官室に極秘に監視カメラでも設置しているのだろうか。

「いやっ……、そ、それが……、実は……、オヤツサンに渡す前に、あのダンデーーナ西の龍王に横取りされちまつたんでさあ！」

「はあ？ 敖閨様が？ なんでよ？」

「さ、さあ？ 幻の銘酒を飲むため？」

パツシーン、とハリセンで引っぱたかれたが、ホークス君のボケは実は正解でもあるのだ。西海だけに……。

「いまは敖閨様が持つてるのか。まあ、それはそれでいいとして……。なんかちよつと向こうのほうが気になるな……。ホークス君！」

「へ、へえ」

「小龍を連れてきて。私は向こうに行ってくる」

「はあ!? 小龍ってあの貧相な龍っすよね？ え、ちよつと！ 『向こう』って

「どー!?」

詳しい説明をせずに屋根からストンと降りて、歩いていく碧霞元君が、
「だから向こう」

と、指をさす。方向としては軍事エリアのようだ。

火雲宮にある南方軍の敷地では、犬猿の仲のはずの二人が顔をつきあわせていた。敖丁と陽輝である。

そこは無機質な機械が並んだ『実験室』であり、『所長室』でもあるのだが、いまは食べ散らかしたスナック菓子や、ビールの空き缶などがそこそこに転がっているせいで、夜勤中の用務室のようだ。全て陽輝の仕業である。

「へーえ、これが『北海の至宝』か」

陽輝が古びた巻物をしげしげと眺めながら言った。

火雲宮の宝物庫から盗み出されたものを、さらに敖丁の配下が盗み出してきたものである。

部屋の中央にある物々しい装置は、四つの皿をもった天秤のような外観をしている。ところどころの部品はだいぶ旧式だったが、コネクターでつながれた先にあるパソコンは最新のものだった。

天秤のひとつの皿には美しい扇子が、もうひとつには三十センチほどの懐剣が、もうひとつには拳大の紺碧の宝珠が乗っている。

そして、四つめの皿に乗っている巻物を、いま、陽輝と敖丁が眺めているのだ。

敖丁は陽輝の顔が近くにあることにハッと気づいて、嫌そうに体を引くと、パソコンのキーをたたき出した。

盤古再生——。

四海の至宝を集めるのは大変だったが、ここからは科学者としての自分の技量の問題なので、気楽だった。敖丁は軍人稼業よりも、実験のほうが好きなのである。

「本番は明日だからね。まだちよつと気になることもあるんで——」
そう言ったところで、窓外にひよこつと現れたのは碧霞元君だった。

「あ、集まったの？」

思わず陽輝も敖丁も身構えたが、武器を向ける前にその挙動は空気の手錠によつて阻止された。

「落ち着きなさいって」

碧霞元君がなだめるように言うが、敖丁はちよつとしたパニック状態である。

この地下室には窓がないはずなのに、いま、碧霞元君は青い空をバックにした「窓」を開けてこの部屋に入ってきたからだ。

「な、なに、いまの!？」

「窓の景色はただの錯覚。私は金行で穴をあけただけ」

あつさり魔法の正体をバラしたが、だからといって真似できる代物ではない。

陽輝は半分口を開けて、いきなり現れた碧霞元君を見ている。

その視線を受けて、碧霞元君は陽輝に微笑んだ。

懐につつこんだままの右手を空気で固定されている陽輝は、あれこれを思い出すのに忙しくて微笑み返すことはできなかつた。

確かにこの四行マイスターとは何度か挨拶くらいはした気がするが、目線会話

ができるほど仲良くはないはずなのだが――。

「碧霞元君、なんのご用件で？」

敖丁がブスっとしたまま言う。

礼をとる気はまったくくない。不法侵入してきたのは向こうなのだ。敖丁からしたら当然である。

「確かに私は『敖明の計画を邪魔したいなら、いつそあなたがやっちゃえば？』と言ったけど、まさかそれを実行するほどお馬鹿さんだとは思わなかったよ」

第一声は文句のようだった。非難めいた口調である。

「ご存知なかったんですか。僕ほどの大うつけも居ませんよ」

「盤古を再生する気？」

敖丁は少し考えて、

「いえ、むしろ、失敗する気、ですね」

「どういうこと？」

「そこまで説明する義理があります？」

「ないけど、聞かせてもらえるとありがたいね」

この二人の間に利害の一致はないし、雇用関係も、上下関係もない。だが、碧霞元君は、自分の計画を遂行するにあたって、一度、敖丁と話をしたことがある。

そのとき、敖明の盤古再生という計画を横取りすればいい、と提案したのは確かだ。

しかし、だからといって本当に盤古真人が復活することは碧霞元君は望んでいない。

「個人的にはね、強すぎる力はないほうがいいと思っではいるけどね。宮仕えだとそうはいかないのさ」

敖丁のその言い方で、陽輝にはなにかが分かったらしい。頭を抱えた。

どうやらもう右手は動くようだ。

「お前の『スポンサー』は天ちゃんかよ！」

「それを探ってたんでしょ？ 元帥の命で。直接聞けばよかったのに。ご苦労だったね」

秦帝は敖丁に、敖明の計画を阻止するための権限を与え、九雷は陽輝に、敖丁

の行動を見張るように、それぞれ命令を下した結果、こんなややこしいことになってしまったのだ。

なぜそんなことが起こったのかというと、龍王家というしばりのせいである。なにせよ龍王家は特別なのだ。

元帥は龍王や元龍王を逮捕できる権限はないし、それができるのは秦帝だけとすれば、秦帝が龍王家のことを内々に敖丁に頼むのは自然の流れといえた。

結局は、九雷と敖丁のコミュニケーション不足だったということになるが、なぜ敖丁が九雷に報告も相談もしなかったのかというと、それは、やはり敖丁の意地があったからだろう。

「まったく、しちめんどくせーことしやがって！　もとはと言えば、おめーらの親子喧嘩のせいだろうが！」

陽輝はドサツとソファに座り込んだ。

「こんな無駄な仕事したの久しぶりだぜ。あー、バカらしー」

陽輝は煙草をくわえたが、「火気厳禁」と敖丁に言われて、火をつけるのは諦めた。

「なるほど。陛下の一存か。あっさり『北海の至宝』が手に入ったのもそういうことなのね」

碧霞元君が言う。

「それで、やっぱり陛下は盤古を再生して将神を作るつもり？」

「そうなんじゃないの？ 緑麗には本当はやらせたくないって言ってたし」

「でも、あなたは実験を失敗する気である。でも、それは言っちゃいけないわけね」

碧霞元君は納得したように一、二度うなずいた。

敖丁も苦笑している。

「ところで、この部屋、ヘンなフィールドかけてるね？」

碧霞元君があたりを見渡した。

「そりやまあ、極秘でやってますから。貴女はどうやって突き止めたんでしょう？」

「至宝の密集具合でね、分かった。この部屋みたいに五行をシャットアウトしても、四海の至宝だけはなぜか分かるんだ」

「ほう……」

敖丁が感嘆の声をあげたとき、鍵がかかっているはずの重たいドアが開いて、ひとりの男が入ってきた。

「……！」

碧霞元君は一瞬逃げようかと思っただが、逃げる理由はなかった。

「あれ？　なんで分かった？　まだ報告いれてないぜ？」

陽輝がのらくら声をかける。

九雷である。

「お前たちが行方不明扱いなもんで、敖明が刑吏に手を回した。このままでは四方軍が凍結される」

「はあ？」

陽輝と敖丁が身を乗り出し、

「……？　なぜ碧霞元君が居る？」

九雷がそう言ったとき、四海の至宝がいつせいに強烈な光を放った。

実験室には五行の流れをここだけシャットアウトするフィールドをかけていたのである。

その分、衝撃がこの空間内にこもってしまった。

碧霞元君は無傷だが、敖丁と陽輝はまともにあたりを食らってしまった。九雷の姿は消えている。

碧霞元君はまずはフィールドを解除して、二人のうつぶせの男の体をよいこらしよつと仰向けにした。二人とも息はある。さすがに鍛え方が違うらしい。

それぞれの行のエネルギーを少し余分に与えて、回復力を高めてやった。すなわち、敖丁は火行、陽輝は金行である。

「理由はわかんないけど、たぶん最悪のことが起こったね」

碧霞元君は立ち上がって、全身のホコリを払った。

「四つとも至宝が消えてる。九雷元帥がスイッチになって盤古が再生されてしまったか」

独り言である。聞いてる人はいないだろうと思ったが、

「たぶん、西はニセモノですよ……」

すすけた顔をした敖丁が目を閉じたままそう言った。

「そうなの？」

「確証はないですが、たぶん」

考えてみれば——考えなくとも——西海龍王が素直に本物を渡すはずはないのだ。敖丁もそれはずっと不審に思っていた。

「そんなニセモノが混じっている状態で、魂魄を再生できるもん？」

「ニセモノと言っても『限りなく本物に近いニセモノ』ですから。おそらく、盤古ではない、始祖の魂魄の欠片を元に作ったレプリカでしょう。僕が妹に返却したのも、それです」

「ふーん？」

「四つとも全部盤古の魂魄の欠片じゃなくてもある程度は機能するんじゃないですかね……。胃潰瘍で胃を半分取っても機能するように」

「なんていい加減な。よくそれで科学者を名乗れるね」

「科学者なんて存外いい加減なものですよ」

敖丁はきしむ体で笑っていた。

「ですから、完全体ではないと思います。いくらかパワーは落ちてるでしょう。元より、万が再生されてもリミッターはかかるように細工しました」

「そう。分かった。私はアレを止めに行く」

「お願いします……」

そうして碧霞元君が消えたあと、むっくり起き上がった陽輝は、

「俺も消えるわ。南方軍の施設で発見されるとまずい」

「……そう。じゃあね」

敖丁は疲れていたもので、それ以上なにも言わなかった。

青い顔した副官がそろそろやって来るだろう。

碧霞元君は走りながら天真に電話をした。一分ほどの間に一方的に濃縮還元した情報は伝えたが、相手がそれで理解したかどうかは分からない。

それでも天真なら来てくれるだろうと思った。自分の頼みだから、という自惚れではなく、彼の性格上、職業上、こういった事故は見過ごせないからだ。

(あっちだ……！)

大通りは突っ切った。

地理を知って走っているのではない。碧霞元君は「大きなエネルギー」を追いかけているだけである。

その「大きなエネルギー」の向かう先には色々な強い気配があった。

濃紺の軍装の男が鉄筋の建物に入っていくのが遠くに見える。間に合わない、と思った。自分は足は遅いし、体力もないので、どうしたって追いつけない。

(近道！)

建物の入り口付近に水道管が埋まっているのを感じた。当然、金属でできている。これなら簡単だ。水道管に大きな穴を開け、水が噴出したところに飛び乗った。体重の軽い碧霞元君なら三階分くらい水に乗って飛ぶのはわけない。

金行と水行を使えるからこそできる、単純な近道だ。

窓は、両手にした扇子で風を送りぶち破る。正確にはここでも金行を使っている。

部屋の中に転がり込んで、いままさに放出されたすさまじいエネルギーを扇子でブロックした。

これで、何人かは守れたはずだ。

「早々と出たね、亡霊」

目の前には、九雷であって九雷ではない、四分の三の盤古真人。

そういえば、あとの四分の一は誰なのだろう、と碧霞元君は思った。

始祖は数人居たというが、全員の名前と正体が分かっているわけではない。

しかし、例えば伏羲や女媧ならなんとかなるのではないか、という気がする。

盤古とは主張を異にしていたという二人だ。

「亡霊？」

盤古が声を発した。

「そうか。確かに、亡霊みたいなものだな。だが、心配するな。俺は誰かの命を取りにきたわけではない」

「じゃあ、なにしに来たの」

「さあ……。様子を見にきただけ、と言っておこう」

「……？」

「しかし、この俺に、一番最初に立ちふさがるのがお前だとは思わなかったぞ、碧霞元君」

「そのわざとらしい借り物の喋り方はやめてくれない？ 貴方は本来、そういう存在じゃないはずだよ」

「フム……。四行マイスターには苦痛か」

「なぜ私のことを知ってるの？ 私は、貴方が死んでから、はるか後に産まれたんだよ？ まさか『四海の至宝』としてチャホヤされていたときの記憶もあるというの？」

「さあ。あるような、ないような……」

碧霞元君は腹芸ができないので、時間稼ぎをしているわけではないし、情報を引き出そうとしているわけでもない。

ただ、流れのままに「対話」をしているだけだ。

「一応、三回くらいは言うつもりだけど、その喋り方をやめて。これで二回目ね。自分でやって気持ち悪くないの？ 私はもうかなり気持ち悪くて吐きそう。今朝はハムエッグと味噌汁の朝食だったから、相当スゴイものが出てきちゃうけど、いいの？」

事実、喉元まで“それら”が上がって来た。

このまま吐き出してもいいのだが、かろうじて押し戻した。吐いてる間に攻撃されては間抜けもいいところだ。

「しかし、本来の喋り方など、もう忘れてしまった……いや、待てよ？」

盤古の気配がふつと変わった。

「あ、そういえば、確か、二十億年ぐらい前に、龍王と長々話し込んだのが最期だったっけ？ あれ？ 違ったかな？ 伏羲とかも居たような……？ そうだ、

思い出した！ いや、あのとときさー、僕ねえ、反対したのよ」

これはなんだろう、と碧霞元君は思った。

まるで多重人格者の人格が切り替わる瞬間に立ち会ったような感じだ。

「反対したって、なにを？」

「人種が違おうと共存できないって、住み分けしないと争いが起きるって最初の龍王が言うもんだからさ、そんなことないよ、きつとみんな仲良くできるよ、って言ったんだけど、それは綺麗事だって言われちゃってー。そんなつもりで天地を分けたわけじゃないのにね」

天地を分ける――。

それが盤古の唯一にして最大の偉業だ。

「そうそう。それで思い出したけど、ここに来たのは『黄龍の保持者』を見に来たのね」

「……甲斐馨を？ なぜ？」

碧霞元君はさつきからその甲斐馨が苛立っているのを知っている。

その心情は分からなくもないが、恋人の体を取り返すのが先だろう。怒りはお

さえるべきなのだ。

「好奇心っていうか、責任感っていうか。この子は成功例でしょ？ 仲良き事は美しき哉。天に星、地に花、人に愛——ってね」

「……なにそれ。さっきの攻撃的な氣を放った人の言葉とは思えないね」
そう言いながらも、碧霞元君はいま盤古が使った『成功例』という言葉が氣になつた。

（輪廻の成功例ってこと？ いや、「保持者を見に」と強調したのだから、外来者である黄龍と融合した成功例っていう意味？）

あれこれ考えていたので、沙龍の挙動を止める暇はなかつた。

「寝てろ！ この偽者がああッ！」

ゴツ……

鈍い音がした。人間なら確実に死んだであろう。

沙龍が木刀のようなもので盤古を殴つたのだ。

「あ、それ、九雷元帥の体……」

もしかして彼女はそれに気づいていなかったのだろうか。

ただのソックリさんだとも？

「え……？」

沙龍が青くなっていた。

その後、青くなつたままの沙龍を放置して、碧霞元君と景春はひとまず対策を練るだけの時間を確保した。

「これは本当に元帥の体なのか？」

景春はさすがに落ち着いている。

「そうだよ。やっぱり、同じ血を持った人でないと入り込めないみたいだね」

「盤古の血、か……」

景春はなにか思うところがあるらしい。

ほどなくして、

「お嬢、連れてきやしたぜ」

ホークス君が窓辺に現れた。その背に乘せられた小龍は、キョロキョロしてい

た。なぜ連れてこられたのかは分からないが、なにか大変な事態になっていることは理解しているような。

「ありがとう。間に合わなかったけどね」

聞けば、小龍は火雲宮のエリアをうろろうろしていたらしい。

特にすることもなくなったので、碧霞元君はちようどいい、と聞いてみた。

「さて、甲斐馨。これを聞くのは、二回目になると思うけど、生まれ変わってよかった？」

雑談でもしていたほうが落ち着くだろうと思ったのだが、彼女は不機嫌だった。

「そんなこと考えたことはないし、これからも考えるつもりはないよ」

しかし、碧霞元君は、彼女は不機嫌さで自分の不安をごまかしているだけだと分かったので続けた。

「そう。じゃ、聞き方を変えようか。運命を恨んだことはある？」

「運命……？」

「そう。神獣の保持者として生まれてしまったこと。それを呪ったり、放棄した

「くなったことは？」

碧霞元君は沙龍から輪廻のシステムを否定する答えを引き出そうとしている。当然だ。それこそが碧霞元君の目的だからである。

「確かに『黄龍の保持者』であることはハードだと思うよ。でも、私にとってそれは、手が二本あって、足が二本あるのと同じくらいのことだから、恨むどころか、なくなると困る」

碧霞元君は『これ』を彼女に吹き込んだのは誰だろう、と思った。

誰か、例えば、沙龍が無敵であることを望む者（あるいはその意を汲んだ者）ではないのか？

それは複数かもしれない。

彼女は周囲の思惑によって、小さな頃から心身ともに鍛えられ、強者であることが求められたのだ。

それをくつがえすためには――、

「ひとつ、貴女の前世の話をしようか」

碧霞元君はご法度の部分に踏み込んだ。

前世の経歴を本人に教えることは、たとえ本人が望んだとしても、基本的には許されていない。

なぜなら、記憶はリセットされてこそ輪廻のシステムが健全にまわるように作られているからである。

「前世を覚えたまま現世を生きる」のは規格外なのである。たまにそういった規格外の——これはシステム上のバグといってもいい——人間が出てきてしまうのだが、大抵はすぐ忘れる。子供のときは前世の話をしていたらしいが、大人になつてからはすっかり忘れた、というパターンがそれだ。

ただ、稀に大人になつてもずっと覚えていてる者がいるが、それはバグというより、太古の外来生物による別の話である。碧霞元君はそういった人間を集めて地上にネットワークを作っているが、彼らもまた「輪廻否定論者」である。

話がそれた。

「緑麗の話なら、あまり聞く気はないけど」

沙龍は不機嫌な顔をしたまま言った。

「ううん。いまから三代くらい前の、悲劇のお姫様の話——」

「……………」

「名前はルーシア・フォン・クリストフ。中世東欧の小さな国に生まれて、十八歳で若死にしたお姫様。もしかしたら、貴女も覚えているかもしれない。」

彼女には幼い頃から予知能力があった。少し先の未来が見えるという。例えば、天候、戦争の勝敗、人の別離……。そういったものが、ふとした拍子に見えてしまう。

両親は、娘の妙な能力にいち早く気付いて、なるべく人目に触れさせずに育てた。もとより、この子には『二十歳まで生きられない』という二重の制約があった。てね。

一つは、玉帝の掛けた『呪』によるもの。

もう一つは、それにかこつけて、賢しい悪魔が彼女の特異な能力を横取りしようとして交わした『契約』のせい。

群雄割拠の時代だからね。ルーシア・フォン・クリストフの能力は、時の為政者たちには非常に便利だったはずなんだけど、両親は娘を政治の道具にしたくなかったから、城の奥でひっそり育てたんだよ。

しかし、どっちみち、彼女には遅かれ早かれ死ぬ運命しかなかった。その最期も、ご丁寧に『悲劇的な死に方』とセッティングされていた。

『悲劇的な死に方』って、どういうのだと思う？ 玉帝は具体的なシナリオを決めていたわけじゃない。緑麗に掛けられたその『呪』は、生まれ変わるごとに内容を考えて、実行するお役人がちゃんと居たんだよ。

ルーシア・フォン・クリストフのケースでは、彼女の心よりどころでもあった婚約者を使うことにした。実行役のお役人が、陳腐な悲恋物語が好きだったんじゃないかな。

彼女は恋人の裏切りによって、その恋人の手にかかれて死んでしまったの。小さな世界で育った少女にとっては、その裏切りが衝撃すぎて、しばらく、自分がなぜ死んだのか理解できないで冥府を彷徨っていた。

私が見つけたときは、魂魄状態なのにそのまま消えてなくなりそうなほど弱っていて、本当にこれが、あの緑麗の魂魄なのかって、思ったよ。

そういったひどい裏切りを経験した魂魄は、現世にとどまってしまうケースもあるんだけど、ルーシア・フォン・クリストフはいわゆる地縛霊にはならず済

んだ。ただ、生まれ変わっても『彼』を愛せるかどうかは分からないと言っていた」

「……？ その恋人は、その人生限りの人じゃないの？」

「九雷元帥だよ」

「え……？」

「実行役だったお役人をそそのかし、自分がまんまとルーシア・フォン・クリストフの婚約者になりすまし、挙句の果てには彼女を裏切って殺したのは九雷元帥本人だよ」

「ど、どういうこと……？」

もはや、取り繕うこともできなくなった沙龍は、驚愕していた。

「九雷元帥がどういうつもりで実行役を自ら買って出たのか、私は分からないけど、貴女には分かるんじゃない？」

「そんなの……、分かんないよ」

「そう？ ルーシア・フォン・クリストフのときだけ、彼が自ら人界に降りて、その人生に干渉したのは、なにか理由があったはずだよ」

碧霞元君はその理由を大体推測している。しかし、言わないほうが碧霞元君にとって都合がよかったので黙っていた。

「……」

景春がなにか言いかけたので、「やめて」と視線を送った。彼は沙龍のフオローを只是想いだだけだ。

「まあ、その理由はどうでもいいんだけど。それでも、貴女はまだあの人を信じて愛せる？　生まれ変わってよかった、と、いま、言える？」

「……」

しおれている沙龍を見て、さすがに言い過ぎかな、と思ったが、同情はしない。

かたわらでは、小龍が横たわる九雷を起こそうとしていた。

「君のそれは、忠誠なの？　畏怖なの？」

小龍が顔を上げて碧霞元君を見る。その小さな丸い目は怯えていた。確かにこれは敗者の目だ。

「かつて混沌と呼ばれた存在——。君は盤古の血を畏れて恭順しているだけ？」

碧霞元君にとってそれは最大の謎だ。

強大な力を持つはずの小龍が、なぜ敗者となり、勝者に媚びて生きていくことにしたのか。

力の使い方を知らないはずなのに。

その後、駆けつけた天真と四方将神三人のおかげで場は收拾したが、実は一番の功劳者は魁星だろう。

彼がいなければ盤古真人はもうひと暴れしていたに違いない。

夢を操るといふ魁星の能力は普段たいして役に立っていないが、今回ばかりは色んな人の危機を救ってくれた。

魁星をここに呼んだのは沙龍だが、彼のいまの地位を考えると秦帝の息がかかっていると考えてよいだろう。

このめちやくちやになった部屋が、西方軍大将の執務室であることはさつき知った。なぜこの部屋に沙龍や景春が居るのかは碧霞元君にとってはどうでもよかった。

「……」

碧霞元君は木佐と沙龍の様子を見ている。

心配でいっぱいの子を木佐が慰めているようだ。

双子のような二人だ、と思った。見た目ではなく、五行の中での存在がそんな感じなのである。一心同体といってもいいかもしれない。

天真は、碧霞元君が見ているものに気付いて、

「なにか気になることでも？」

「緑麗と真武君って、あんなに親密だったっけ？」

「ああ……」

と、大体分かったようだ。

「以前は普通の同僚でしたけどね。不思議です」

天真は天界に来た当初の二人の様子や、その後も見てきているので、碧霞元君の疑問は分かる。

四神府での緑麗と真武君は、あくまでも普通の同僚だった。仕事上の衝突もなかった。それを知っている者たちにとって、いまの二人の関係はとても不思議なものに映るのだ。

不思議といえば、ホークス君は、景春に対してなにか懐かしいものを感じてい

る。これは自分だけだろうか？　主はなにも感じていないのだろうか？

「あのく、東方軍大将」

ホークス君はひと休み中のところを狙って直接聞いてみることにした。

「ん？　なんだ？」

「どこかでお会いしやした？　以前、東方軍の本部でお会いする前に」

「……？　君みたいな特徴のある霊獣は一度会ったら忘れないうんのだが
そんな覚えはない、と言っている。

「そうですか……」

「生まれはどこなんだ？」

「南海の浜辺で拾われたそうです」

「泰山府君にか？」

「いえ、拾ってくれたのは奥方のほうです」

「ああ、早くに亡くなったという」

「ええ、優しい方でしてね。赤ん坊だったあつしを自分の子のように育ててくれ
て……」

あ、とホークス君は思った。

容姿はどこも似ていないのだが、そういうえば、景春は泰山府君夫人に重なるものがある。なぜだろう？ どこがそう思うのだろうか？

「なら、やはり会ってはいないだろうな。俺は東の生まれで、上京してからはずっと帝都の官舎で暮らしていた。その後は人界周遊していたからな」

「そうですか……」

景春がわりと気さくに話してくれるので、ホークス君の中では「不愛想な堅物」から「職務に忠実な大将」に格上げされた。

さつきまで場を取り仕切って、さくさくと各所に指示を出していたのも景春である。

「君の主は」

と、景春は天真と話している碧霞元君を見て言った。

「少し生き辛そうだな」

「……」

そうなんですよ！ いやあ、分かってくれて嬉しいです！ とは言えなかつ

た。

それは、数回会った程度で分かるようなことじゃないと思ったからだ。

しかし、碧霞元君は実は「それ」をしている。一度会っただけの緑麗を信頼していたし、一度会っただけの景春を「嫌いじゃない」と言っていた。

「……あの」

ホークス君はなにか言いかけたが、景春の携帯電話が鳴って、彼の休憩も終わってしまった。

碧霞元君はホークス君をともなつて事故のあった部屋をそつと抜け出し、敖丁の様子を見に行った。

火雲宮内の病院には居ないだろう。城下町側の民間医療施設を利用しているかもしれない、と街の上を飛んでみたが、どうも帝都内にはあの若様の気配がない。とすれば、自分の屋敷に戻ったのだろう。移動できるのなら（自力にしろ他力にしろ）心配するほどではない。

敖丁を探している最中に、はからずとももうひとりの瀕死の大将の気配を見つけた。こちらは、わりととんでもないところに居る。

「お嬢、場違いじゃねーっすか。やめましようよー。別にお見舞いする義理はないでしょうがー」

ホークス君は止めたのだが、主は気にせず暗い路地裏に入ってしまった。

帝都でも一、二を争う、最下層のエリアである。碧霞元君も足を踏み入れるのは初めてだ。

側溝のあたりではドブネズミがちよろちよろ動いていた。

明かりといえば、少し先にある繁華街から漏れてくるネオンや、薄汚れた看板を照らす豆電球くらいである。

夜になりかけの時間で、まだ死体のようなアル中やらジャンキーやらはうろついているなかったが、さつき通り過ぎた店先に立つ商売女からは怪訝な視線を向けられた。

「お、お嬢……」

「ビクビクしないの。怖いならどこかで待ってて」

小声で叱られて、ホークス君は腹をくくった。もとより、主に敵は居ないはずだ。

確かに、天界領土で碧霞元君が恐れるものはなにもない。五行術が使える限り、銃を向けられようが、腕をつかまれようがなんとでもなる。

たとえば、銃などは金属のかたまりで、碧霞元君にとっては綿あめに等しい。金行マイスターなら瞬時に分解できる。

敵が体術に優れていても問題はない。空気さえあれば水も火も生成できるのだ。

「ここか……」

路地を何度か曲がったところに、薄汚れたレンガの建物があつた。三階建てくらいだ。その建物に入るとツンと消毒薬の匂いがした。

「ごめんください」

木のドアをノックして開けると、ヒグマのような男がのっしりと現れた。ホークス君はビビッてのけぞってしまった。

「おう、どうした。嬢ちゃん、怪我人にも病人にも見えねえが？」

一見、山賊の親玉にしか見えないが、碧霞元君の心眼ではまともな人物に見える。ただ、少し自暴自棄なところがあつた。

(モグリの医者か)

そういうものが居るといふことくらいは知っているが、実物を見るのは初めてだつた。

「えーと、ここに知り合いが入院していると思うんだけど。オレンジ色の髪の人」

そう言うと、ヒグマのようなドクターが鼻で笑つた。

「おいおい、たいしょー、えらい好みが変わつたんじゃねえかあ？」
なにか勘違いして、待ってる、と手をかざすと、奥に引つ込んだ。

ドクターは界限では「ファー先生」と呼ばれている。

陽輝の若いころからの知り合いだ。昔はれっきとした医者だつたのだが、色々やらかして免許を取り上げられ、いまはワケありの怪我人を相手にモグリの商売

をしている。

フアーはベッドで携帯端末をいじっていた陽輝に声をかけた。

「おい、えらいかわいいお客さんだぜ。入れていいんだろ？」

「……？ ああ」

そう言われて、陽輝は一瞬「沙龍か」と思った。

ここを突き止められる能力があつて、こんな場末の奥深くに入つてこれて、フアーが「かわいい」と表現するような人物は沙龍くらいしか知らない。

だから、碧霞元君の水色の髪を見たときは驚いたが「なるほど」とも思った。しかし、意外な客であることに変わりはない。

「かなり体力はぺちゃんこみたいだけど、顔色は悪くないね。よかった」

「ああ、あんたのおかげでカスリ傷で済んだ。ありがとうよ」

と、精一杯の虚勢をはる。

「……これ」

碧霞元君は、サイドテーブルに大きめの紙袋を置いた。

思いつく限りのものを買ってきたが、怪我人が必要なものはよく分からない。

しかも、相手は中年の男で、長いこと軍属で、自分とはまったく接点がない。なのに、なぜそこまでするのかというと、単純に碧霞元君は陽輝のことが好きだからだ。恋愛的意思ではなく、木佐に対する「どこにも負荷のかかっていない人」というのと同じである。

「……？ 俺、あんたになんか恩売ったことあったっけ？」

陽輝はこんな風にお見舞いされる理由が思い当たらないので聞いてみた。

貸し借りで生きている男に、碧霞元君の行動は理解できなくて当然だろう。

碧霞元君は苦笑したあと、

「ごめんなさい。敖丁を焚きつけたのは私なの。ちよつと責任を感じてる」

そう言った。

「いや……、あんたのせいじゃないと思うが……」

「ううん。今回のことでは、あんまり人を巻き込まないようにしようってのは緑麗との約束なのに、既にだいぶ巻き込んでる」

陽輝は「今回のこと」がなんなのかよく知らないが、泰山府君との喧嘩のことだろう、と思った。

「九雷元帥はいまのところ無事だよ」

「情報はちゃんとおさえてる。ありがとうよ」

「うん。敖丁もね」

「あいつはどうでもいいが」

陽輝のその言葉も半分は嘘だと分かっているので、碧霞元君はクスッと笑った。
た。

最後に、

「奥さんには、ケガしたこと、言わないほうがいいの？」

そんなことを聞いた。

「ああ、頼む」

「男の人はみんなそうだね」

碧霞元君は後ろ手に手を振って出ていった。

急遽着任した将神が詐欺まがいの戦法で元龍王を宮倉にぶち込んだ——という情報は火雲宮の西半分——つまり軍事エリア——を一瞬にして駆け抜けた。

当の南方軍は、士官も兵もなにがなんだか分からない状態で、上に指示をあおぐも、その上とて、一番上である大将がずっと行方不明なのでなにも指示できない。

しかし、少なくとも朱子は喜んでいた。

朱子は選民意識の強い敖明を嫌っていたし、もともと敖丁以外に仕える気はなかったからだ。

龍王家の「特別扱い」もあって敖明は予定より早く保釈されるかもしれないが、沙龍が作ってくれたこの猶予期間内になんとか敖丁に戻ってきてもらいうつもりだった。

「この状態で出勤しろってのは、鬼じゃない？」

テレビ電話で敖丁はそう言ったが、顔色はそう悪くない。

大怪我を負って二十四時間は絶対安静だったが、医者はまだ命に別状はないと言っている。

点滴をつるしながらトイレに行けるのなら出勤して椅子に座ってるくらいはできるだろう、と朱子は思った。我ながら鬼かもしれない。

朱子も長年、敖丁の副官をやっているので、どうすればこの上官が動くのかくらい知っている。

「大将代理が居なければ南方軍全軍が凍結されるのは依然変わっていません。です。ので、敖丁大将がお戻りになれないようでしたら、我々は別の代理を立てます。そうですね、もう資格があるのは奏欽様くらいしかいらっしやいませんが」「ちよつと……、臨月の妊婦になに言ってるの。欽ちゃんにやらせるくらいなら僕が——」

言いかけて、敖丁はハツとした。

朱子が画面の中でニヤニヤ笑っている。

「では、お待ちしております」

「……」

やられた——。人使いの荒い副官など持つものではない。

陽輝は紙袋をのぞき込んでごそごそと探っていたところ、口笛を吹いた。

着替え用の新しい服の中に埋もれるようにして、煙草がワンカートン入っているのだ。

いま、陽輝が一番欲しかったものだ。

(あのお嬢ちゃんは結構気が利くし、分かっているじゃないか)

普通のドクターに見つかれば没収かもしれないが、ファーなら一箱あげておけば文句は言わないだろう。

体はまだぎしぎししているのだが、端末くらいはいじれるので祥倫に連絡はしておいた。

(ふーん……、沙龍がねえ……)

自分の代わりに西方軍大将代理をやっているというのだ。

あれだけ軍事職を拒否していたのに、ここに来てその信念を曲げたというのだろうか。

(あいつのことだから、誰かに説得されたってわけじゃねえだろう)

では、誰かのためなのか。

西方軍が凍結されたら困る人のため？ それはほかならぬ自分や九雷ではないのか。

(……ま、いつか)

もしそうなら、沙龍にも殴られればいいだけの話である。

碧霞元君のあの様子を見るに、今日明日に帝都中を巻き込んだ大喧嘩をやらかすつもりはないだろう、と思えた。

なら、天界軍は警戒解除でいいのでは。

と、樂觀視している。

陽輝とは反対に、景春はずっと警戒態勢は解いていない。

もともと帝都防衛も任されている東方軍なので、有事の際には即対応できなければならぬ。

「しかし、あの四行マイスターは本当に父親と喧嘩するつもりなんですかねえ？ あんまりそうは見えないんですけど」

冬踐の呑気な物言いにも、景春はビシツと言ってやった。

「そのつもりだろう。最近、頻繁に外出している」

報告では、いままで一年に一度出かけるくらいだった碧霞元君が、この一か月で何度も天空山を留守にしている。楽観視はできなかつた。

敖丁敖明親子のほうもなんとかしなければならぬが、あつちは敖丁がなんとかするので、と期待半分に思い始めている。

そもそも、東極山で会ったときも、どこかおかしかった。

敖丁とは大した信頼関係はないし、個人的にはソリの合わない男だが、実は職務においては一番忠実なのではないかと思うこともある。そういうえばいつも規則違反をとがめる側だ。

大勢には決してそむかないし、弱者に手をあげることもない。

本人が「バカを相手にすると疲れるから嫌」という表現をしているだけで、やっていることは実直一筋の王霊君とそれほど変わらない。

東極山でも敖丁には結局なにもされてないのだ。

となれば、敖丁の裏切りともいえる一連の件には、なにか超法規的なバックアップがあると考えるのが自然だろう。

それが誰かといえればこの世界ではひとりしか居ないではないか。

（敖丁は秦帝の命により『四海の至宝』を集め、盤古再生実験をしていた。それが失敗したか、当初の目論見とは違った形で起こったのがおそらく今回の件だ）
景春はそこまで考えて、やはり秦帝は敖明を排除するつもりなのだろう、と結論づけた。

『一番上』の思惑がそうなら、やがてそうなる。

だから、敖明は放っておいていい。

景春はそう思ったので、自分は目の前の脅威のほうに集中しようと思った。

碧霞元君と盤古である。

初回は成り行き上、碧霞元君が盤古を止めてくれたが、あの気まぐれな四行マ

イスターがいつまでその役をしてくれるのか分からないので、「次」にそなえなければならぬ。碧霞元君自身の計画のほうも要注意だ。

(……)

そういえば、真武君がなにか言っていたな、と景春は思い出した。小龍の話である。

『混沌』

と、言っていた。

あれは詳しく聞いておいたほうがよさそうな気がする。

戻って来たばかりだったが、また出かけることにした。

「お出かけですか？」

冬践が少々咎めるような口調で言ったが、頷くだけにした。

携帯端末に沙龍からメッセージが入っている。部下を貸して欲しい、とのこと
で、『是』とだけ返事をしておいた。

「すぐ戻る」

景春は大刀を掴んで執務室を出て行った。

四神府に木佐を訪ねたとき、入れ替わりに出て行った青年が景春に会釈をしていった。知らない顔だったが、ちよつと目を引く美形である。

景春は監察府の仕事を兼任しているので、色々な部署の傾向みたいなものを把握している。いまの青年はもしかしたら、諜報部のスタッフかもしれない、と思つた。

それは半分当たっている。

景春とすれ違つたのは白帝君の秘書官の汎々ファンファンである。その容姿の端麗さを買われて諜報部に所属していたのだが、九雷の人事により、四神府に引き抜かれた。

「こちらへどうぞ」

四神府の北の棟には秘書官が二人居て、年配のほうがしやしやしきと案内してくれた。景春の身分が分かっているようだ。

軍装を見れば将校であることは分かるはずだが、見えにくい肩章のラインの数

まで瞬時に数えろというのは酷な話で、彼らも別に軍部以外で特別扱いを期待しているわけでない。

しかし、曹昌^{そうしよう}は景春の顔を知っていたのか、それともミリタリーマニアで瞬時に階級が分かったのか、

「東方軍大将がお見えです」

と、部屋の中に声をかけていた。

木佐は特に忙しそうでもなかったが、いつもの黒衣ではなく、今日は休日の学生のような恰好をしていた。白いシャツの腕をまくって、本棚の前に立っている。資料を探し中、という感じだ。

「仕事中にすまん、ちよつと聞きたいことがあつて来たんだが」

「なんででしょう？」

「小龍の件だ。真武君はあらかじめ知っている口ぶりだったが、『混沌』っていうのはどういう意味なんだ？」

「ああ……」

と、合点のいった木佐は自分の仕事の手を止めて、景春に椅子をすすめた。

景春が小龍のことを聞きにきたのは盤古対策としてである。それが分かっていたので、木佐は九雷から届いた短いメッセージのことと、盤古に対抗するには惑星の核くらいしかないのではないか、という自身の推論を伝えた。

しかし、景春は、

「よく分からん。もう少し詳しく頼む」

と言うので、資料を示しつつ説明した。

実はさつき探していたのも、この件に関わりのある本だ。

「景春大将も長いこと人界に居たようですからご存じかと思いますが、人間の歴史では、『天地開闢』はあくまでも神話の話で、本当にあったことだとは認識されていません。事実、僕も以前は信じてなかったんですが、こちらの世界に来てみて、盤古が天地を分けたというのは史実だろうと思うに至りました。その根拠はいくつかあるんですが、いまは省略するとして。

九雷元帥が若い頃、玉帝の命で創成の全容を解明する仕事をしていた話は知ってます？ 大将クラスには機密オーブンされてるって仰ってたので、僕も漏洩罪には問われないと思うんですが」

「いや、過去の事件は調べてないし、知らないが……。なんでそれを四神府の君が知ってるんだ？」

「僕は飲みに行ったときに本人から聞きました。まあ、だから、冗談なのかもしれません」

「そういう席で冗談を言う人か？」

と、景春が真面目に突っ込むので木佐も笑った。

木佐も、あれが冗談だとは思っていない。九雷は自分を信頼してくれている、というのとは分かっている。

「具体的には『混沌』の行方を調べていたそうです。盤古に制されたという『混沌』はいつたどこへ行ったのだろう。消えてなくなったわけではない、という説があったらしくて。まあ、実際、消えてなかったわけですけど。

しかし、その調査中に西方神界からの邪魔があった。向こうも同じことを調べていたようです。あわよくばその『混沌』を取り込もうとしていたのは、玉帝も、西方神界も同じだったってわけです。そのとき、西方神界のチームを率いていたのがルシファーだったと聞いてます。

そのせいで、結局、調査は中断された。けど、九雷元帥は『混沌』の正体と行方をつきとめています。どういうわけか『混沌』は自分の恋人のそばにいたわけですからね。

なぜ地表から消えていた『混沌』が、数千年前に出てきたのか。それは、黄龍の出現があったからです。『黄龍』も『混沌』も、もとは惑星のエネルギー体なんですよ。混沌は同類を求め、黄龍はこの惑星の核が潜在的に有していた姿、『龍』に触れて、同じ形態を取った――。そういうことです」

「……」

景春は、木佐の話聞いていて、ずいぶん昔のことだが、士官学校で教科の講義を聞いているような気分になった。そういえば、真武君は学者だった。

「で、小龍がその『混沌』だ、と？」

「そうです。なんの力もない、性別も不明の幼龍が、我々の居るこの惑星の代表なんです。でも、それは本人が敢えて選択した姿で、実際には盤古にも対抗できる力を持っているはずです」

「そうか……」

木佐のその言葉は、勝機はないわけではない、と聞こえた。

善は急げ。まずは小龍を確保するのが先か、と景春は木佐に礼を言って四神府を辞した。

12 小龍を探しに

黒焰虎こくえんこは九雷が意識不明になってからは、ずっと水雲宮で待機している。

「俺が居ないときは沙龍を守れ」

という九雷の言いつけを守っているのだ。

水雲宮最上階のテラスで半分眠っていたその黒焰虎は、空からやって来たコンビと、地上に姿を見せた客については、無関心だった。

敵意のない者については特に注意を払う必要はないからだ。

「目的地は北緯三十四度、東経十三度。岡山県倉敷市、龍王山——」

沙龍がそう言ったとき、

「小龍を探しに行くのなら、俺も混ぜてくれ」

エレベーターから姿を現したのは景春だった。

「景春さん……どうして？」

沙龍が聞いた。

「小龍は切り札だ。盤古対策のな。そして、打倒盤古は天界軍の仕事でもある」

「……」

碧霞元君とホークス君は、この人とはなにかと縁があるな、と思った。

偃月は初対面である。

「東方軍も凍結されちゃわない？」

「俺は正式に仕事で行くんだ。西と南は、許可なく消えたから凍結騒ぎになっただけだ」

「あ、そうなの」

想定される親子喧嘩二組も、敖明の逮捕と碧霞元君の日本行きで想定外となったので、景春はしばらく自由に動けるらしい。

「君は？」

と、景春が偃月に顔を向けた。

「あ、私の弟。同道するのでよろしく」

「よろしく、東方軍大将」

偃月がにこやかに挨拶するので、景春もつられた。

「こちらこそよろしく」

景春は二人を見比べて、

(似てる……)

と、笑いをこらえるハメになった。

かたわらでは碧霞元君が思い出したように言っている。

「あ、ホークス君はお留守番ね」

「えっ!? ええええ〜!? そりゃないっすよ! お嬢! あっしはどこまでもついていきやす!」

「なに言ってるの。ホークス君が人界を長時間うろうろしてたらサーカスに売られちゃうよ。今回、着ぐるみ作戦は通用しないからね」

以前、人界にお使いで出かけたときは「着ぐるみです」で押し通したのだ。

しかし、今回は長丁場になると予想されるので、こんな大きな喋る鳥は連れていけない。当然、黒焰虎も留守番だ。

ホークス君はしばらく喚いたり嘆いたりしていたが、最終的にはしぶしぶと承諾した。

「黄花洞にひとり残つてもしょうがねえんで、遊んでてもいいすか」
「いいよ」

「じゃあ、キサコさんのところで料理習ってきやす」

いつのまにかホークス君は木佐のファンになっているようだった。

「なんか、珍妙なパーティーだなあ」

偃月がそう呟いていた。

(第三部につづく)

